

「産業×福祉」シンポジウム

～高齢者は“智慧”の伝道者～

第1部 基調講演

「ばあちゃんたち高齢者の『働く』の可能性を日本中に示す！」

講師：うきはの宝株式会社 代表取締役社長 大熊 充さん

第2部 パネルディスカッション

「『産業×福祉』という考え方をどう広めるか」

パネリスト

畦地 和也さん（高知県自治研究センター理事・元黒潮町教育長）

山首 尚子さん（土佐町集落支援員・元土佐町社会福祉協議会事務局長）

大熊 充さん（うきはの宝株式会社代表取締役社長）

コーディネーター

野田 満さん（さんぞデザイン共同代表・近畿大学総合社会学部講師）

2025年11月29日(土) 13:30～

高知サンライズホテル



公益社団法人 高知県自治研究センター

「産業 × 福祉」シンポジウム

～ 高齢者は“智慧”の伝道者～

日時：2025年11月29日

はじめに 1

第1部

基調講演

「ばあちゃんたち高齢者の『働く』の可能性を日本中に示す！」..... 3

講師：うきはの宝株式会社 代表取締役社長 大熊 充さん

第2部

パネルディスカッション

「『産業 × 福祉』という考え方をどう広めるか」..... 21

パネリスト

畦地 和也さん（高知県自治研究センター理事・元黒潮町教育長）

山首 尚子さん（土佐町集落支援員・元土佐町社会福祉協議会事務局長）

大熊 充さん（うきはの宝株式会社代表取締役社長）

コーディネーター

野田 満さん（さんそデザイン共同代表・近畿大学総合社会学部講師）

参考資料 45

「産業×福祉」シンポジウム

～ 高齢者は“智慧”の伝道者～

日時：2025年11月29日

(司会)

皆様こんにちは。定刻になりましたので、ただいまから「産業×福祉」のシンポジウムを開会させていただきます。

大変お忙しいところお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。私、本日の司会を担当させていただきます高知県自治研究センター事務局長の折田でございます。よろしくお願いいたします。

「産業×福祉」シンポジウム、分かるようで分からんと思われる方が大勢おいでになると思います。ご案内のとおり産業も福祉も大変重要な行政課題でございますけども、それぞれ別個に施策は打たれております。ただ、私たち活動を再開して20年ぐらいになるんですけども、当初から産業と福祉は融合させて施策展開はされるべきであるという立場で研究を行ってまいりましたし、人口減少の今の時代こそ、本当にまさに産業と福祉を掛け合わせた政策展開が求められているんだというふうに思っているところがございます。そういう問題意識から本日のシンポジウムについて企画・実施をさせていただいているところでございます。

私どもがどうして、どういう経過でこのシンポジウムを開催に至ったかということにつきましては、お手元の資料の中に参考資料という形で載せてありますので、ぜひ後でご覧になっていただきたいというふうに思います。

いずれにしても、今日の3時間足らずのシンポジウムの中で、「あっ、そういうことなのか」というような共感が得られたらいいなということでこのシンポジウムやらせていただいておりますので、最後までよろしくお願い申し上げます。

それでは、冒頭、開会にあたりまして、高知県自治研究センター常務理事である石川俊二のほうからご挨拶を申し上げます。

(石川俊二常務理事)

皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました高知県自治研究センターで常務理事を仰せつかっております石川と申します。本来であれば理事長の東森のほうからご挨拶申し上げるところですが、県外出張をしておりますので、代わりに私のほうからご挨拶を申し上げたいと思います。

今日が11月29日ということで明後日はもう12月、師走になるわけですが、11月非常に暖かい日も続いておりまして、各地で今年の収穫を祝うようないろんなイベント等も開催をされている、そういった大変お忙しい週末に多くの皆さんご参加いただきまして、ほんとにありがとうございます。

お手元に柿色のペーパーをお配りしていると思います。この中にも少し記載されているんですけども、去年の6月から、それまで高齢者の方がつくっていた漬物を、一定の施設・設備を用意しないと製造販売ができないということに食品衛生法が改正をされました。食品衛生という観点から言えばそれもやむを得ない面もあろうかなと思うんですが、しかし、それによってお年寄りの生きがいであるとかお客さんや地域の方との交流であるとか、そしてわざわざではあるとはいえ収入であるとか、そういったものがなくなった、断ち切られたというそういったことが起こったわけです。



その一方で、私思うのは、例えばそのネオニコチノイド系の農薬なんかについては、これはヨーロッパなんかは、胎児への影響であるとか発がん性とかそういったものは否定できないからといってだんだん規制が厳しくなっています。しかし、それにもかかわらず、日本はそういったことは証明できないからという同じような理由でどんどん規制が緩んでいるというそういった方向にあって、先ほど食べ物の例えで申し上げましたが、どうもこの全体の方向性がおかしいのではないのかなというふうに思っているところでもあります。

今は食べ物に関してのことを申し上げましたが、食べ物だけではなくて、地域のお年寄りの方がそれまで培ってきた、あるいは自分が身につけた伝統・技術、そういったものがこのままなくなっていく、断絶されていくのは非常にもったいないわけです。そういったものを活かしながら地域で高齢者の皆さんが元気に働き、交流し、そしてそのことによって地域が元気になっていく。本日のシンポジウムは、そういったことを学ぶ機会になれば非常に嬉しいと思っておりますし、やはりそこは東京目線ではない地域づくりでありますとか地域での幸せの追求であるとか、そういった目線も大事かなというふうにも思っているところでもあります。限られた時間ではありますがけれども、ぜひお互い学び合う、そういった

場にしていただきますようお願いを申し上げます。冒頭のご挨拶とさせていただきます。本日はよろしくお願いたします。

(司会)

それでは、簡単に今日の流れをご説明をさせていただきますというふうに思います。これから第1部、基調講演を1時間程度受けまして、10分ぐらいの休憩を挟んで、第2部として基調講演を深める形でパネルディスカッションを行っていきたく思っております。16時30分までには終わっていきたくというふうに思っておりますので、よろしくお願い申し上げます。

それでは、第1部、基調講演に入っていきます。講師には福岡県から大熊充さんをお招きをいたしました。大熊さんのご紹介ですが、おそらく基調講演の中で触れられると思いますので、私のほうからは簡単にご紹介をさせていただきます。1980年に福岡県のうきは市生まれでございます、2019年に今日のお話の主眼であります「うきはの宝株式会社」を創業されて現在に至っております。「ばあちゃんたち高齢者の『働く』の可能性を日本中に示す！」を演題として、1時間程度の講演をいただきます。大熊さん、よろしくお願いいたします。



第1部

基調講演：「ばあちゃんたち高齢者の『働く』の可能性を日本中に示す！」

講師：うきはの宝株式会社 代表取締役社長 大熊 充 さん

ご紹介ありがとうございます。うきはの宝株式会社の代表取締役の大熊充と申します。よろしくお願ひします。福岡といいましても山々に囲まれた高齢化率60%を超えているような過疎地域からやってきました。あとで詳しくご説明しますが、過疎地域のビジネスって思われがちなんですけれども、僕らは過疎地で生まれたんですけども、もう全国に、都市圏に進出していってるとい、ちょっと変わった逆の会社ではございます。でも、創業の地はこの福岡のうきは市っていう農村からスタートしております。

僕はそもそも全く高齢者に関わるような仕事はしていませんでした。とはいえ、もう10年近くかなり激しいペースでおじいちゃん、おばあちゃんたちと、当初は仕事上じゃなく地域活動とかも含めて関わるようになって、今では「ばあちゃんおじさん」と結構呼ばれてまして、ばあちゃんなのかおじさんなのか分からないくらいおばあちゃんに詳しくなってきたかなと思ってます。

かなり余談ですけど、昨日高知に初めて来て。ちょっとホテルの近くのお店とか行って初めて炭焼きタタキってのを食べさせていただき美味しかったですけど、なんか驚いたのは、街中ですけども、屋台にいっぱい人が集まって、すごい盛り上がりてるなあっていうのを感じました。初めての人がばかりですけども、早速おばちゃんとかおばあちゃんたちに絡んでって、仲良くなりました。こういう活動を全国でやっています。全国のおばあちゃんたち、ちょっとおばあちゃんちゅうと申し訳ないですけど、ばあちゃんジュニアですね、おばちゃんたちにも絡んでっていろいろお話を聞いてるっていうような形になります。

話を戻しますと、演題にもあるとおり、ばあちゃんたち高齢者の可能性を日本中に示すということで、取り組んでおります。最初に注意点なんですけど、別におじいちゃんを外してるわけではござい



せん。最初はじいちゃん、ばあちゃんたちとやっていこうとしたんですけど、今もおじいちゃんたちもいるんですけども、ここはちょっと苦戦しているところです。今「ばあちゃんビジネス」って僕ら言ってますけど、今後は「じいちゃんビジネス」ってのを展開する予定です。ですので、男性とか女性とかっていうので何か差別しているとかいうことは全くございません。

あと勘違いされるのが、我々は公共とか福祉、医療とか全く関係なくて、ただの民間会社でございます。助成金、補助金などは一切取らずに、おばあちゃんの手だけで稼いで会社を發展させてるっていうような会社になります。

75歳以上のおばあちゃんたちが働ける会社ということで、おばあちゃんたちの仕事、働く場をつくるという形でやっております。なぜ75歳か。これにはまあ根拠はあるんですけども、短めに言うと、単純に75歳以上のおばあちゃんたちにこの国では雇用、働く場がないからです。ですので、75歳以上って言ってますけれども71歳、68歳のばあちゃんジュニアという人たちも働きに来てくださってます。75歳以下お断りではございません。結局おばあちゃんが入った人たちが、もううちも会社7~8年やっていますので、ばあちゃんジュニアがばあちゃんに繰り上がっていくっていうような仕組みです。ちょっと不謹慎かもしれないけれども、ジャニーズ事務所と同

じ方法をとってますかね、おばあちゃんになる前に60代70代の人でも働いてもらって、長く勤めてもらってリーダー格になってもらうというような仕組みです。

ばあちゃんビジネスって、よく知られてくるようになりました。ちなみに、真ん中のおばあちゃん、おいくつぐらいに見えますかね。(資料1) もう手も挙げずに口頭で思いつきで言っていたらいいかなと思うんですけども、何歳に見えますか。70ぐらいですよ。でも真ん中のおばあちゃん、もう90超えております。右側が84歳かな。左側が一番若手で78歳ですね。これは、僕が若く見えたり美しい女性を集めてきているわけではございません。あとできちっと出しますけれども、もうこれは証明されてますけど、働くことで、老化を抑えるんです。これは僕が言ってるんじゃないで、学者さんたちがうちを研究して言ってます。あと、やっぱりこれはちょっと女性特有かもしれないですけど、うちはビジネスをばあちゃんたちとやってるので、まあお客さんと常に触れ合うというか接客したり関わるので、やっぱりおばあちゃんたちが美しく保とうとなりますので、異様にうちの会社のばあちゃんスタッ

フたちは若いですね。今平均年齢は84になります。一番上は93歳までいます。これは多分日本だけじゃなくて世界も驚いてはいるんですけど、普通に、まあいろんなおばあちゃんたちが働いてるっていうような形です。

すみません。最初に宣伝になってしまうんですけど、受付のところに本があります。(資料2) うちの取り組みとして、会社にする前も含めて約10年間ぐらい真剣におばあちゃんたちの可能性に取り組んでいったことについて、大手出版社の小学館というところから今年出版されたものです。これまでの経緯とか、あとノウハウも詰め込んでますので、多分1時間だと100万分の1ぐらいしか話せないの、ぜひ帰りに買っていただいて読んでいただけたらいいかなと思ってます。

そうですね、自己紹介までして、ちょっと動画流したいなと思います。僕は高齢者文脈ではなくて、皆さんがデザイナーをどう捉えるかってところもあるんですけど、もともとはデザイン文脈の人間です。まあもちろんビジュアル的なものとか企業さんが発表するお手伝いもやるんですけど、どちらか



といったらデザイン思考とかデザイン経営とかいう形で課題をデザインのアプローチで解決するっていうことをやっています。学問と事業をやっているような形であります。

資料3の下の部分、一部になりますけど、保有している商標だったりブランドですね。ばあちゃんブランドを多数保有してやっております。ちょっと載せてないけど「ガールズバー」ってのも展開してまして、ご存知のとおり「ガールズバー」の「バー」は、ばあちゃんの「婆」です。今までおばあちゃんたちと、食が中心だったんですけど、今カバンとかバッグ、全部「ばあ」ですけど、「ばあ」が付くものでどんどん展開しているというような形になります。

ここで動画を見ていただきたいと思います。今、若者に人気のなんか社会課題系メディアのRICEメディアっていうところが1分で紹介してくださっているのと、皆さん知ってると思いますけどYahooさんがドキュメンタリーでうちを取り上げてくださってる3分の動画です。

(動画視聴)

僕たちの会社は、福岡県と大分県の県境の山々に囲まれたところでスタートしております。もともとは農業従事者ばかりの農村だったんですけども、自然豊かでめちゃくちゃいいとこですね。当然僕ふるさとが好きで、ここに残って事業を展開してるところです。先ほど言ったように特にうちのエリアは高齢化率はもう60%、まち全体ももう40%超えていて、典型的な超高齢化地域となっております。

ですので、僕の世代やその下の世代は、「もうこのまち終わりだ」ってみんな出ていくようなまちになっています。2050年には人口が半分になるといわれ、このまちまあとんどん沈んでますので、じいちゃん、ばあちゃんも含めて、まあ暗い暗い空気が出てるんですけども、僕はやっぱりふるさとが好きですので抗いたいなというところで、何もないところからこの事業をつかって展開していったというような形になります。

今でこそこうやって高知に呼んでいただいたり、全国から呼んでいただけてますけど、当時はもう99.9%こんな会社は成立しないし必要ない、続くはずがないと言われました。(資料4)あと、これ今

年商1億円! (目標)

ばあちゃんビジネス

高齢者に「働きがい」と「収入」を届ける新ビジネス

年金問題、認知症、高齢者雇用
高齢化問題を解決!

米スタンフォード大 長寿研究所も大注目!

従業員は75歳以上の
おばあちゃん!


大熊充 著

小学館 定価1,800円(13%税込)

ご購入をお願いします!

2025年4月2日小学館より販売。
これまでのうきはの宝のばあちゃんたちが働く取り組みを一冊の「ばあちゃんビジネス」という本にまとめました。

Amazonにて販売していますので、コチラのQRコードを購入して頂くか、Googleで「ばあちゃんビジネス アマゾン」と検索して頂いてAmazonのページよりご購入をお願いします。



資料2



うきはの宝株式会社
代表取締役 大熊 充

1980年生福岡県うきは市出身、経営者&デザイナー
20代にデザイン事務所を創業。その後地域の課題解決の為に何か出来ないかと
学び直しの為、2017年4月専門学校日本デザイナー学院九州校に入学して、
グラフィックデザインとソーシャルデザインを学ぶ。
在学中に、社会起業家育成のボーダレスジャパン主催のボーダレスアカデミ
ー二期福岡校を修了して、超高齢化が進む農村でおばあちゃんたちが働くことで
「生きがい」と「収入」を得れる、75歳以上のおばあちゃんたちが働ける会社
「うきはの宝株式会社」を2019年10月に設立。
日本デザイナー学院 ソーシャルデザイン科 非常勤講師
北九州市地域コミュニティビジョン検討会議 審議員
福岡県よかこビジネスコンテスト アンバサダー
厚労省生涯現役地域づくり普及促進事業 有識者メンバー

デザイン思考・デザイン経営



ばあちゃん新聞

資料3

とはいえ、高齢化率

60%超 町全体 40%超

99.9% 成立しない

こんな会社…

必要ない

続くはずがない

資料4

スタンフォード大学 ケン教授がうきはの宝を研究・視察

ケン氏は健康長寿を大学で研究している。うきはの宝の働くことで経済活動をするので「生きがい」が健康寿命を伸ばすことになることに言及。

現在、国内外の研究機関や大学が多数、弊社に視察に来ています。



高齢者が活躍する事業持続可能な事業と評価され、多数の受賞歴があります。また、首相官邸からも先進事例として「うきはの宝」のことを公式に広報していただきました。



主な受賞歴

福岡よかとこビジネスプランコンテスト 大賞受賞
INACOMEビジネスコンテスト 最優秀賞（日本一）
福岡県男女共同参画表彰「社会における女性の活躍推進部門」受賞
「地域再生大賞」ノミネート
福岡県6次化商品コンテスト 最知事賞受賞 他多数

先進事例として紹介

農林水産省先進事例、経産省デザイン経営事例として各官庁で紹介される。

資料6

す。働くこと、実は働くの中に大事なコミュニケーションというのがございますので、これが健康プラスになるってのはもう医学界でも割と当たり前の話になってきてます。ただコミュニケーションとるよりは経済活動を入れたほうがいいよねっていうのが僕の考え方になります。だから、経済活動を必ずやらなきゃいけないってわけでもないんだけど、プラスに働くよというところで学者さんも認めてくださったことをやっているということになります。

ほんと福岡の田舎なんですけど、今、大体月間でも海外から100人ぐらい政府機関とか研究者がまた来てくださって、それを世界に広めようとしております。国も今はすごい評価してくださって、首相官邸へ呼ばれたり、さまざまな省庁の先進事例で載ってたりしております。四国は担当してないですけど、今結構県とか自治体の有識者メンバーってことでアドバイスしたり、国も同様に厚労省の有識者メンバーということで官僚にレクチャーしたりしています。僕は現場の人間なんですけれども、やっぱり現場でおばあちゃんたちに詳しいですので、そしてやっぱり僕もこの高齢者にまつわる制度とか仕組み

を変えたいという思いがありますので、最近はそのようなのを果敢に挑戦しております。

ばあちゃんの半分は介護を受けている人

これも僕強く思ってるんですけど、僕らは別に福祉をやってるわけじゃないから、認知症とか介護を受けてても全く除外してないですよ、もうフラットにやっているので、比率としては半々ぐらいですかね。40人から50人来ていただいているけど、半分ぐらいは認知症があったり介護を受けてたりして、半分ぐらいはただ地域のばあちゃんが地域に働きに来るみたいな感じで混ぜてます。それが混ざることが何かいけない世の中みたいになってるけど、全くいけなくも何もなくて、僕から見たらただのばあちゃんですので、全く問題なく混ぜてやっています。

やっぱり超高齢化っていうだけあって、お客さんも下手したらうちのスタッフより年上のお客さんとかも来たりしてますかね。若い子も来ます。なので、うちはほんと多世代でお客さんたちが来てくださるというような形です。

最初に言ったように、ばあちゃんばあちゃんと特

化してますけど、よく勘違いされるのが、ばあちゃんにもものすごいなんか偏愛、変態的な愛情があるんじゃないかって思われてるんですけど、僕はじいちゃん子ですので、決してそんなことはございません。ちょっと結論から言うと、ばあちゃんたちのほうが圧倒的に乗ってきたんですよ、「やろうぜ、やろうぜ」って。男女を差別するつもりはないんだけど、おじいちゃんたち、この世代80代90代のおじいちゃん結構気難しいんですよ。年下の僕がリーダーで、指示を出すってなったらもうすごい反発するし、実は「じいちゃん酒場」っていうお店をやっけて、じいちゃん店長で、営業中酒飲んで悪態つき始めたりして、大失敗しちゃいました。男女差別するつもりはないけれども、おばあちゃんたちはそうならないんですよ。お客さんたちを喜ばせよう、その瞬間を楽しもう、あとチームで目標を設定してそこに行こうってことについては、圧倒的に女子のほうがパワーがあるんですよ。まあ僕もさっき実績言ったりしてしまいましたが、結局男性はやっぱり過去にとらわれて、何だろう、今をちょっと楽しむ能力が低いのは実際そうかなと思ってます。でも、それはそれでじいちゃんの特長もかなり理解できてるので、僕はじいちゃんたちにやっぱり教育、防災、防犯、こういったところで活躍してもらえないかなってことで、じいちゃんビジネスは事業の種類を変えようとしております。

あとは、これは実践して現場で思ったことなんですけど、やっぱりじいちゃんとおばあちゃんを混ぜたら駄目だったのは分かりました。今のご時世、フラットに男女すべて同じです、ジェンダーレスですかね。ジェンダーのことは言うなって言うけど、実際リアルでは男性と女性、じいちゃん、おばあちゃん違うんですよ。実際に違うので、なので僕はやる仕事は分けます。今じいちゃんたち一部来てくれてるけど、みんなもう傾向が分かってるんですよ。おばあちゃんっぽいじいちゃんしか来てないんですよ。おしゃべりはするけど手も動くと、おばあちゃんたちの中に溶け込める人たち。そうじゃないのはもうぶつかって、すごいことになります。ですので、じいちゃんを外してるわけじゃありません。これからどんどんじいちゃんビジネスもやっていきます。

今福岡県の会社ではあるんですけど、急激に発展させていってるので、今全国に展開しております。始めた当初よりかはやっぱり注目していただいています。例えば和歌山市であと2日後に「ばあちゃん酒場」という屋台がオープンするんですけど、それは20代の社長がやるんです。彼女には並々ならぬ思いがあって、自分のおばあちゃんがコロナで、当時やってたお店開けられなくなって、それで一気に体がおかしくなって認知症にもなってしまったというのをまざまざと見てきたので、おばあちゃんに何か活躍し続けてもらいたいということなんです。そこでその20代の子が社長で立ち上げるのを手伝ったわけです。そういう形でどんどん増やしていってます。なので、うち単体としては50~60名ですけども、全国にそういった教え子とか提携してるところ合わせると数百人いるというような形になります。

うきはの宝は多世代型協働組織

あと、これがなかなかちょっと僕らも伝えにくいところなんですけど、実はおばあちゃんだけでやるわけではなくて、我々は10代、18歳から93歳までのとんでも変わった組織なんです。(資料7、資料8)多世代型協働って僕がつくった言葉です。多世代型交流っていうのはよく使われてる言葉ですけど、協働とは協力して働くってことですね。僕は中年のおじさんで45歳なんです。それこそ高知の広末涼子さんと同い年ですけども、間の世代ですので、なんかいがみ合ったりとか価値観が違うことによって争うんじゃないくて、やっぱり協力してこれから先、特に我々のような地方では、世代が違うことによってぶつかり合うんじゃないくて、協力して乗り越えていかなきゃいけないよねってことでこういう組織にしています。

僕はじいちゃん子だったってのもありますけれども、やっぱりおばあちゃんたち、おじいちゃんたちをものすごく尊敬しています。あと、まざまざと感じてることは、やっぱり地域の中でもともと培ってきたものがどんどん今失われてるんですよ。もう食だけじゃないです。文化も風習も、もういろんなものが消えてってます。それはじいちゃん、おばあちゃん

んたちが受け継いでたんだけど、そこから先が受け継がれてないんですよ。これを、全部は残せないけど残していきたい。もちろん文化っていうと文脈が違うんですけど、ビジネスにして循環していかないとやっぱり残っていかないんですよ。お金が発生しないとやっぱり残しようがないというか、その残す予算がないんですよ。ですので、ビジネスを組み合わせて残していこうとしています。

あとじいちゃん、ばあちゃんたち、大切なことを知ってるんで、これを若い子たちに気づいてもらう。もちろん今、便利な世の中になったけれども、歴史がやっぱり証明してますよね、先人たちの知恵ってのは、やっぱり良いものは残していかないと。スマホとかネットで見るといいんだけど、そこには載ってない知恵、知財があります。今は主に食をやってるけど、しめ縄だったりそれ以外もやっぱりやっています。地域の一番は確かに郷土料理で、そういうのを商品化しようというふうに動いてますけれども、ほかのこともやっております。

この写真（資料8右下）よく親戚の集まりと間違えられるんですけど、これがうちの株式会社です。前列が90代、真ん中が70～80代、左右に若者とおじさんが散らばってるという謎の組織です。あと会社と関係ない、近所のばあちゃんも来ています。なんかもうコミュニティの中がぶっと入ってます。ちょっと非営利的な要素もあるけど、うちの会社、近所のばあちゃんたち来たら飯食わせたりしてるんですよ。もうそれも良しとしています。その代わりに、「ごめん、YouTube 出てね、うちのチャンネルに」って、飯と YouTube 出演を交換したりしております。なので、スタッフじゃないばあちゃんたちも出入りしてるっていうふうな組織になります。

僕が学生るときからですね、若者が右肩にじいちゃん、左肩にばあちゃん乗せて苦しいっていう社会保障の図があります。今これがさらにどんどん広がっています。もう僕が強い思いを持った1つでもあるんですけど、10年前ぐらいに老害っていう言葉がこの日本にできて、この老いたら害とかって今当たり前に使われてますけど、もうこれは個人的にもうむちゃくちゃ許せないんです。老害って恐ろしいこと言ってるんですよ。なぜならば、僕もあと20年したら高齢者ですし、今有識者もなんか老害とか使い

始めてるんですけど、あなたたちも年取ったら害になるのかっていう話なんです。私たちは違うとかって言うんでしょうけど、恐ろしい概念つくったなと思ってます。僕はこれをぶっ壊したいと思ってます。ただただじいちゃん、ばあちゃんたちを大切にしたいじゃなくて、じいちゃん、ばあちゃんたち当事者とともに「私たちは老害ではない」ってのを証明しようとすることによって、僕が高齢者になったときいじめられなくて済むようにしておきたいなっていう自分ごとでやっております。どう考えても、老いたら害だとかという概念をこれからどんどん持ち込むのは、この国にとって良くないと僕個人は思っております。なので、これをひっくり返したいと思っております。

ばあちゃんビジネスにたどりつくまで

とはいえ、僕も10代20代からこんな高い志持ってやってれば、もうちょっと実績というか形をつくれたと思うんですけど、結構おっさんになってこの強い思いを持ってしまって、40手前36ぐらいのときにこの事業をやろうと思ってしまったんです。経緯としては、20代のときバイク事故を起こしてしまって4年ぐらい入院してるんですよ。結構長い入院生活で、20代の4年って、ちょっと人生が終わってしまったなあって感じでもう完全に精神壊してしまっていました。病院時代にですね、人としゃべれない精神状態まで来てしまったところ、同じく入院してたおばあちゃんたちに励まされて、僕は社会復帰してきているんです。

まあおばあちゃんたち、僕に同情してるわけじゃなくて、全員不眠症なんで、とにかく夜、ナースステーションに僕らは集められるんです。僕も毎日死にたい、死にたいって言ってたんでやっぱり目を離すと危ないので、同じく目を離すと危ないおばあちゃんたちと夜中は一緒に暮らしてたわけです。もうとにかく僕人としゃべりたくなかったのに、おばあちゃんたちに四六時中絡まれて、「あんた、何で怪我した」とか、あと、その怪我の具合を聞かれないのにどんどん根掘り葉掘りばあちゃんたちが聞いてくるんです。今だったらもしかしたら怒るかもしれないですけど、当時はやっぱり塞ぎ込んでたん

会社概要



会社名	うきはの宝株式会社
本社所在地	○本社：福岡県うきは市浮羽町妹川4333-1 ○福岡市支店・ばあちゃん喫茶：福岡市城南区梅林3-28-6（シェアオフィス&シェアハウス完備） ○福岡市早良区URしかた団地連棟店・ばあちゃん喫茶：福岡市早良区しかた団地 ○春日支店・ばあちゃん喫茶：福岡県春日市須玖北5丁目155
代表者名	大熊 充
設立年月日	2019年10月1日
電話番号	0943-76-9688
Emailアドレス	ukihanotakara@gmail.com
従業員数	50名 アルバイト・委託含む
営業内容	高齢者の就労・農産物の加工・農産物の販売・ばあちゃんたちの昔ながらの味の食品製造販売・通販事業・商品企画・商品開発・高齢者の就労のコンサルティング・ばあちゃん新聞発行・ジューバー喫茶の運営
認可・免許資格	飲食店営業・惣菜製造許可

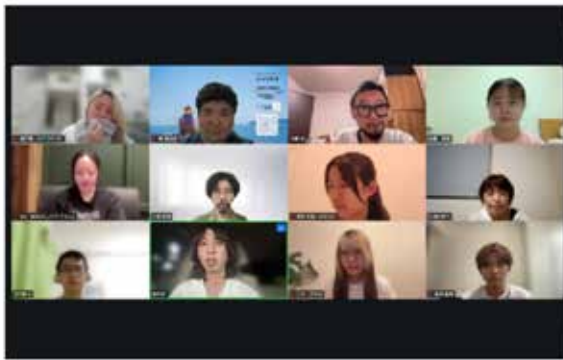
最大の特徴

20歳～93歳までの

多世代型協働

資料 7

とっても変わった組織



18歳～93歳までの

多世代型協働

大学生・専門学校生 15人

75歳以上のばあちゃんたち 40人

※インターン生・委託スタッフを含む

年齢

下は18歳、上は93歳まで

多世代が協力して働く株式会社。



資料 8

で、おばあちゃんたちが僕のことを同情するわけでもなくもうコミュニケーションとりまくったので、いくらなんでもおばあちゃんたちしつこすぎるなっていうところで、僕は怒りじゃなくて笑いが出たんです。やっぱり僕の中ではおばあちゃんが僕を社会に戻してくれたっていうのがあるので、おじいちゃん、おばあちゃんの中でちょっとおばあちゃんを優先してるというところはございます。なので、僕もビジネスマンで営利、お金を稼いでやろうっていうところをやってるんだけど、多分最も強いところは、やっぱりおばあちゃんたちに頼られる人間になりたいっていう強い思いがあるっていうのが根底にあります。

病院から退院してきて、いきなり、よしばあちゃんと働くぞって集めたわけじゃありません。最初は非営利のボランティア活動で地域のじいちゃん、ばあちゃんたちの困りごとを解決しながら、僕に今後やれることないかなっていうところからはじめました。僕、昭和の人間なんで、やっぱり地域の他人のじいちゃん、ばあちゃんたちに育てられた世代なんです。でも30年ぐらい経った今、日本ってお互いが全く関わらないってことになっちゃってしまって、ものすごく寂しいなと思って、そこをなんか昭和の時代に戻したいなと思ったんです。僕は地域のじいちゃん、ばあちゃんたちにほんといろんなことを教わって、もうすごく怒られたこともあるんですけども、いまだに覚えています。やっぱり今田舎でも子どもたちが親と親戚以外関わらないとかっていうのは結構多くなっていて、そこをちょっと戻したいなと思って、じいちゃん、ばあちゃんたちと話をするという非営利の活動からスタートしてます。もう今は1万人超えてますけど、ばあちゃんビジネス始まる前に3,000人ぐらいのじいちゃん、ばあちゃんたちに話聞いてきて、アンケート取ったんじゃなくて全部対話によって声を集めてきました。その中で僕がこれが課題だなと思ったのは、じいちゃん、ばあちゃんたち、やっぱり特に国民年金の受給だけでは生活が苦しいって言ってるんですよ。あと、ばあちゃんたちから見たら僕若者なんで、若者がこうやって訪問すると喜ばれるんです。人と話すのが1週間ぶりだとかとか、大熊君と会って話して、翌週誰とも話さなかったとかということは結構

ざらにありました。ですから、僕はこの生活困窮と孤立の問題、ここを何か解決できるようなことできないかなって思ったのがきっかけです。

あとは、どのぐらい具体的にお金足りないのいうことを集めてきました。ほんと皆さん口々に国民年金プラスまあ月2〜3万収入があれば生活が楽になるって、おっしゃいました。これ後でいろんなシンクタンクとか国のデータと照らし合わせたんですけど、ほとんど変わらなかったですね。今もあんまり変わらないんじゃないかなと思っていて、さっきも話してましたけど、この数字は実際リアルな数字かなと思ってます。

僕はもともと不登校児になっちゃって中学校も卒業してないんですけど、中学校から就職できずにずっと経営、ビジネスはやってきてるんです。このおばあちゃんの家以前にも、もちろん勉強しながらやってきたんですが、とにかく飯を食っていくために会社を立ち上げるみたいに、ビジネスを勝手にやってきたんです。だから、最初月に2〜3万かって思っちゃったんですよ。今若手雇うのって厳しいけど1人30万ぐらいないと必要ですよ。これは比較しちゃ駄目なんだけど、若い子1人に30万の給料を渡すって、おばあちゃん15人ぐらい来るやんって思ってしまったというところですね。なので、結構そこは全然シンプルに、ああこれいけると思っていきなり立ち上げたってことです。

生きがいの4要素

うちが大切にしていることは、おばあちゃんたちの生きがいとそれが収入になることです。おばあちゃんたちを駒とか頭数と見てないんですよ。あと、仕事内容についてもすごく研究しています。企業とかから、ゴムを削ってくれ、竹に穴を開けてくれと、下請け、孫請けで内職みたいなものの依頼がいっぱい来るけれども、全部断ってます。おばあちゃんたちに最初それがやりたいかって聞いたら、誰もやりたくねえと言われました。できれば私たちの得意なこととか、そういったもので仕事して、お客さんに喜んでもらえるようなことをしたいっておっしゃったのが印象的です。なので、私たちはあえて人と関わる仕事、これは体にもいいけど精神にもいいん

です。体と心はつながっていますので、精神に良ければ体も良くなるっていうのがありますので。

あと、仕掛けとして、ありがとが必ず生まれるような仕事をあえてつくっています。感謝される、それらが見える、本人に届くような仕事をわざわざつくってるといことですね。これが一番重要なと思ってます。それがワンセットで、働くことで健康寿命が延びるってのを実現させてるってところですね。ですので、工場での流れ作業が悪いわけじゃないけれども、そればかりをつくり出さないってのをやってます。利益率が低かろうが、あえてお客さんとコミュニケーションが生まれるようなことを、やるってのを決めてやっております。

ここが重要だと思ってるんですけども、皆さん、言葉として、「生きがい」は聞いたことありますよね、当然聞かれたことあると思うんです。ちなみに「生きがい」って日本人だけしか使ってないってご存知ですかね。世界にはございません。僕もそんな専門家じゃないのでこの仕事を始めて考え始めたんですけども、この「生きがい」って、これめちゃくちゃ重要なものが詰まっております、今

世界が研究をしております。

ちょっと分かりにくいかもしれませんが、シンプルに言うと、うちの会社そのものもこのロジックのもと組み立ててるんです。(資料9) 1番目は好きなこととか得意なことですよ、つまり情熱を傾けられるとか、好きなことです。2番目は得意なことです。3番目はお金になることです。お金になることも生きがいの1つだって、これちゃんとしたところが出してます。4番目、需要があるってことです。

僕は日本のあらゆるところに、生きがいとは何なのか、ぜひこれに真剣に向き合ってもらいたってのを伝えたいんですよ。福祉とか医療の現場の方には申し訳ない、福祉を否定してるわけじゃないんですけども、障がい者の文脈、高齢者の文脈で必ず抜け落ちているのが、4番目の需要があるということなんです。たとえば、レクレーションでつくってバザーで売ろうっていうと、全く売れてないし赤字になってるんです。相談はたくさん来るんですけども、それってやっぱり1番と2番だけでやってないですかってということなんです。僕らが最も重要としているのは4番なんです。需要があることで

国民年金プラスの
月に2~3万円収入があれば生活が楽になる
 と多くの声を聞きました。

生きがい & 収入

人と関わることで精神にも良い。
 ありがとと感謝されるやりがい。
 働くことで健康寿命を伸びる。

“ikigai”チャート
A JAPANESE CONCEPT MEANING “A REASON FOR BEING”

1 **好きで** (What you LOVE) / 好きなこと
 2 **得意で** (What you are GOOD AT) / 得意なこと
 3 **お金になり** (What you can be PAID FOR) / お金になること
 4 **需要がある** (What the world NEEDS) / 世界の求めるもの

Center: **ikigai**

Quadrants: **A** (PASSION MISSION), **B** (PASSION PROFESSION), **C** (PROFESSION VOCATION), **D** (MISSION VOCATION)

© 2016 GOROJIB DESIGN

資料9

教育 と 教養

教育

きょういく

今日行く場所

教養

きょうよう

今日やる用事

国民年金プラスの

月に2~3万円収入があれば生活が楽になる

高齢者を保護ではなく

協働 共に働く！

機会の創出！

働き方

- ・アルバイト
- ・委託
- ・謝礼

※お金・報酬を伴った経済活動

GOOD!!!

資料 10

す。おばあちゃんたちを無駄に得意なことで作業をさせるとかやってないですよ。必ず需要があるところを見つけてきて、そこにおばあちゃんをマッチングさせる。そしたら幸せが、生きがいが生まれます。幸せや幸福も生きがいになり近いです。非常に人生も豊かになりますね。幸福学っていう学問があるんですよ。日本で言ったら多分「日本でいちばん大切にしたい会社」大賞の坂本先生とか、慶応大の前野教授とかです。前野教授が幸福学としてやってるのは「幸せの4つの因子」って説です。僕ら一般人でも分かるような形で、幸せは因子分解すると4つで構成されているみたいなのが普通にネットで出てます。この4つが歯車のように回り始めるとやっぱり循環を起こすなと思ってます。

僕はこのように置き換えています。人々の営み、暮らし、それが大きくなって、地域とか国とか言ってますけど、全部循環の話だと思っています。人間がそもそも循環で生きてるはずなので、この循環を再構築するっていうのが重要なかなと思ってます。僕はデザイナー出身なんで、こういうのが好きなんです。ここの3、4があるといいよなっと思ってます。需要があるということは、その需

要があるお客さんがすごい喜んでくださって、おじいちゃん、おばあちゃんに「ありがとう」って言うんですよ。そうすると、おじいちゃん、おばあちゃんたちがさらに仕事が好きになる、得意になる、喜ぶ、幸せが生まれる。しかもそれがお金になるんですよ。いやお金にしなきゃいけないです。僕もボランティアやってきて思うんですが、やっぱりボランティアやってきてやっぱりつらいことあるんですよ。つらいことがあって、結局やっぱりお金も足りなくなるので、お金はあったほうがいい、ただのツールというか対価です。

きょういくときょうように

働くという経済活動を組み合わせる

僕、働くって正義と思ってなくて、別に全員が働く必要はないと思ってただけ、もう一つ、年寄りには教育（きょういく）と教養（きょうよう）がやっぱり必要だと思ってます。（資料10）きょういくってというのは、お勉強ではなくて「今日行く場所」ですね。これを教育と言ってます。きょうようも、勉強ではなくて「今日やる用事」です。ほんと

高齢女性（おばあちゃん）の活躍の考え方



もう福岡だけじゃなくて、全国各地の年寄りの方々が亡くなってきてるところで、非営利でもいいんだけど、これにちょっと働くという経済活動を入れたらいろんな財源要らないじゃんってところでやっています。ですので、働くが正解じゃないけど働くを組み合わせるんです。うちも7年続いてますけど、あと大事なのが、僕も飯食ってるし、若いスタッフこれでご飯食べてますので、雇用と仕事生まれるってところですね。だから、じいちゃん、ばあちゃんを主役に我々ご飯食べさせてもらうことまでできるっていうところまで循環できるかなと思っています。

月に2〜3万。まあ当然ですけど、結局うちは働きの来た回数と時間が多ければ報酬は高くなります。一番稼いだ人が月8万円ぐらいですかね。そのぐらいのレベルなんだけれども、僕はそれでいいと思っています、おばあちゃんたち、むちゃくちゃ喜んでるんで。月2〜3万なければならぬってことはなくて、やっぱり8,000円でも1万円でもバイト代が入ってきたら、もうおばあちゃんたちはものすごく喜んでくださってます。金額の大小ではないってのを現場で結構感じてます。なので、全体的に非営利

とかボランティアは否定はしておりません。これは営利活動のほうがいいよねってやってるだけです。

なので、僕たちは全く高齢者を保護する気はなくて、協力して働く、機会を創出するというところでやっています。これもうスタッフのばあちゃんたちがもうめっちゃ言うてくれて、変な話すごい僕は嬉しいんですよ。「大熊君がもうほんとこき使うと」「どんどんこき使ってね」って、うちのスタッフのおばあちゃんたち言うんです。これ僕嬉しくて、こき使ってほしいっておばあちゃん言うてるんですよ。これ事実そう言っていて、当然おばあちゃんもこき使われてきついかしんどいときはそれは言うから、私を使ってくださいと言ってくださいます。やっぱりすることがないってつらいつらいつらおっしゃるので、こき使ってほしいってのはほんとだなと思っています。

まあそういうデザイン・設計、事業も、僕がこれ10年か8〜9年前につくったものなんです。これ説明するとすごい時間になるんだけれども、こういう設計を先につくって、実際に実証、まあ会社すらも実証実験でやってみるっていうところです。多少修正、編集はするにしても、大体6〜7割ぐらいは設

計図どおりに行ってますかね。(資料11)

役に立っているという感覚が大切

これも印象的なんですけれども、入居も含めて相当数の介護施設で、僕が実際に会っておじいちゃん、おばあちゃんたちに、今何が生きてて楽しいかを聞いて回ったんです。おじいちゃん、おばあちゃんたちを保護したりするのが福祉だし、それはいいこともあるけれども、実際に聞いてきたら、何が楽しいかって聞いたら、介護の職員さんたちをじいちゃん、ばあちゃんたちが手伝って、ありがとうって職員さんたちから言われたときが一番幸せですってじいちゃん、ばあちゃんが言ったんですよ。僕も結構衝撃で、まあお風呂から食事から全部準備してもらってるけど、誰かを手伝ったときに幸せを感じるって言ったんですよ。僕も僕個人の金儲けだけをやるのってつらい。やっぱり誰かの役に立ってるとか、地域とか社会の役に立ってるっていう感覚は、僕らビジネスマンだけじゃなくて、じいちゃん、ばあちゃんも当然持ってるというところはあるんですね。

僕の課題感としては、75歳以上のおばあちゃん、おじいちゃんもです、体は元気で動くんだけど、年金の受給だけでは生活がままならなくなっているんです。(資料12) もう一つ大きいのは、役割を失って、生きがいを失ってきってるっていう。そうところに役割をつくりたいと思ってます。アプローチとしては、これもう僕ら世代とかほんと無関心ですけど、高齢者の孤立の増加にどう対処してるかって言ったら、結局、我々の税金を投下してどうにかしようとしています。けれど、僕も含め若い世代の方が、高齢の方々が孤立しないような場をつくったり役割をつくることによって間違いなく社会保障費下がっていきますし、おじいちゃん、おばあちゃんたちの幸福度は上がります。まあ働く場じゃなくてもいいんだけど、やっぱり孤立に目を向けて居場所をつくるっていうことが重要だと思ってます。働く場だとなおいいと思ってます。だって、お金を生み出すし循環するので。なので、全体としては居場所をつくるべきだってアプローチですね。

僕は老害って高齢の方々を呼ぶのは嫌だから、社会のお荷物じゃないよ、全員輝かなくてもいいし、輝けない人が悪いんじゃないと言っています。で

課題感

75歳以上のばあちゃんたちが体は元気で動くが、国民年金の受給だけでは生活がままならなくなっている。役割を失くし生きがいを失っている。

ばあちゃんビジネスの考え方

「働く」「経済活動」



① 生きがい と 収入を創る



② 健康寿命を伸ばす



③ 社会保障費、医療費の削減

※認知症を抑えていく。
働くことで老化を抑える。

アプローチ

1. 高齢者の孤立の増加は社会のコスト増。
孤立への働く場での高齢者の居場所作り
2. 高齢者は社会のお荷物じゃない。
活躍の場、輝く場を創る。
3. 元気な高齢者が「働く」という
選択肢を創り、高齢者就労の機運を高める。

資料 12

も、活躍できる人をわざわざ閉じ込めたり、活躍の場を奪うんじゃないんです。あの漬物の話ありましたよね。もうまさしくそうですよ。わざわざ活躍できる場とか輝く場をつぶしていくんじゃないかっていうところですね。今まで元気な高齢者が働くっていう概念なかったんですよ。批判され続けたんですが、働くことは悪じゃありません。我々のように週5回四六時中働くんじゃないかって、週1~2回適度に午前中だけ働くっていうのが幸せになれる適度な働き方だっているのを見つけたんです。なので週に1~2回会社っていうかお客さんのために働いて「ありがとう」って言われるのは、健康にむちゃくちゃいいですね。なので、ばあちゃんビジネスの考え方としては、基本は働く経済活動なんだけれども、生きがいと収入を得て、これが健康寿命に必ずつながっていき、果ては社会保障費、医療費の削減につながっていくというものです。

これも学者さんたちから我々に教えてもらってはっきりと分かってきたのが、認知症の進行を抑えることができるということです。最初にお見せした若々しいおばあちゃんの姿、働くことで老化を間違いなく抑えていってますね。これは認知症予防ではございません。僕も確かな先生たちと一緒に勉強して分かってきたのが、人は老いれば必ず要素的に認知症にはなるということだし、なることが悪じゃないんですよ。別に忘れっぽかったっていいじゃないですか。認知症になったとしてもできれば地域の中で暮らしていけるようになれば、もう何も問題ないと思います。僕もすごい忘れっぽいですし、今認知症のおばあちゃんたちに日々僕怒られてるんで、「大熊くんは忘れっぽいんで駄目だ」つって。そんな程度なんですよ。

なんかもう認知症って言葉、僕はこれも変えたいです。認知症って言葉をなぜ一般人が、医療関係者でもないのに、「あの人、認知症のおばあちゃんだよ」とかって、なんで人のことを症状で呼ぶんでしょうね。僕は、忘れん坊将軍とかうっかりさんとか、もうちょっとポップで前向きな名前に変えればいいんじゃないかと思います。我々もですが、なんかみんな高齢者の皆さんは認知症を恐れてるんです。現場で、まあしょうがなくして認知症のおばあ

ちゃんって言っちゃうけど、スタッフの認知症のおばあちゃんが、私はね、もうとにかく認知症にだけはなりたくないんだって言うんですよ。いや、あなたもう認知症だからみたいな、おかしいことが起きてるんですよ。なので、やっぱり概念は大事ですよ。老害も良くない。認知症って言葉もなんか良くないですよ。これをやっぱり変えていきたいですね。

雇用から委託へ

先ほど言ったように、なるべく得意と特性を活かして楽しく適度に働くことが大事です。だから、食と料理はちょっとじいちゃんには合わなかった。じいちゃんの得意と特性を生かして、どンドンじいちゃんビジネスもつくり出そうとしています。

詳しく説明したかったんですけど、時間の関係でちょっと流していきますけど、まあもともとは雇用で時給でお支払いしてたんです。福岡で時給1,087円。まあ全体の労働者としては望ましいことだけど、やっぱりばあちゃんたちにノルマを課さなきゃいけないのってことになるので、ばあちゃんたちと話し合った結果、委託のほうがいいってことになりました。そこで、今は委託を圧倒的に増やしてます。顧問弁護士もいますし、適法の範囲で業務を切り分けて、委託でやっております。おばあちゃんたちからは何も不満は出ていません。ゆっくりやっても1,000円だし、早くやっても1,000円だし、どうぞ自由に、品質だけは我々見ますよっていうやり方が、一番いいと思ってます。なので、雇用じゃなくて委託のほうがいいかなということで、今は一気に切り替えるようなところになります。

全国に広めるノウハウ

まあ今全国各地で、申し訳ないですけど四国は抜けてるんですけども、関東ぐらまでは、さっき言ったように教えてる子たちがどンドンばあちゃんビジネス、じいちゃんビジネスを広げてってるといような形になります。ちょっとここ大事なところなんですけど、よく僕が特別な存在と思われるんですけど、7年間どの地域にも入り込んで、大体新しく依

頼があった全く行ったこともない地域に1か月以内にこのばあちゃんの会社とかばあちゃんチームを形成してビジネスを始めるんですよ。それがなんか異常だって言われるんですけど、ここのノウハウはすごい持ってます。今アクティブシニアとかも呼ばれてますが、やっぱり体が元気な80代、まあ90代も結構いらっしゃいます。じゃあどこにいてどう巻き込めばいいのかなって、全国でこれよく聞かれるんです。僕らのノウハウとしては、基本的に初めましての地域、何も分からないので、最初社協に行きます。社協は絶対協力してもらってというのが強くありますし、地域のネットワークもう当然持ってますので、元気でリーダー格のばあちゃん、ちょっと紹介してって言います。そのときにやっぱりキーワードとなるのが、全国組織の食生活改善推進会（食審会）ですね。食育とか子どもたちに食を通じて幸せな人生をってことで、もともと地域で活動をしているおばちゃん、おばあちゃん方がいるので、その元会長さんとかを訪ねて、僕の思い、会社の思いを伝えてます。大体必ず賛同してくださるので、「よし、やろう」ってなって、そのおばあちゃんたちはもともと会長ですので、昔の部下とか後輩たちがわんさかいるので、リーダーのばあちゃんさえ見つければすぐに組織をつくれるっていうことになります。

そのほか自治会、町内会なども、もはや悪いとは言わないですね。どこの地域行っても「わあ、いいね」と。もちろんリスクと責任とお金はうちが取るから、この町でやりたいんだって言ったら、まあ今はどこも賛成していただけますかね。あとボランティアやってる方々にも、ボランティアいいことだけど、少しお金出るんだったら働きたいってばあちゃんたち結構いるんですよ。なので、そういったところを一番最初に、もう入ってすぐ初日ぐらいに行って一気に固めていきます。

そうすると、実は僕が全部ばあちゃんたちをマネジメントしてるというより、リーダーのばあちゃんがマネジメントしてくれてるんですよ。最初はやっぱりうまくいなくて、会社の中で何度もばあちゃんたちの派閥ができて争いが起き、お土産のおやつを取り合い、もうとんでもないことが起きます。会社対ばあちゃんチームで争いが起きたり、これ悩みに

悩んで、そもそもマネジメントするのをやめようと考えました。リーダーばあちゃんだけをマネジメントすれば、あとはもう、その世代の方々、絶対逆らえない先輩後輩関係みたいなのがなんかあるんですよ。だからやっぱり地域に絶対的なリーダーがいるので、その人たちにおばあちゃん方をマネジメントしてもらおうというような形をとって、今もうほんとけんかがなくなりましたね、おかげさまで。もう夜つらくて、僕、そのとき日々泣いてましたもん。どっからそっから、ばあちゃん連れてきて、明日から仲良く働いてねってやってたのが間違いだったなと思って、ばあちゃんたちがばあちゃんを採用するっていうことで、僕は若手しか採用面接はしてないという感じですね。

広がる事業内容

実際ビジネス的に何してるかっていうと、いろんなことをやってはいるんですけど、大きくは5つですね。（資料13）ばあちゃんたちと料理、郷土料理とかもそうですけど、明太子とか食品つくって、これは通販で伸ばして行ってます。通販で大きな収益を上げる。やっぱり福岡で福岡の郷土料理つたって、地域の人は別に食べていいっていうので、これをやっぱり東京、関東に持っていきってというのがポイントですかね。うちが重要としているのは、稼ぐためには外貨を獲得する、外からお金を獲得してくるというふうに徹底してますね。地域に還元するってところをやってます。地域の人は安く買えたりするっていうことですね。

あとは、お配りしたこの「ばあちゃん新聞」というものです。これも99.9%うまくいくはずないって言われたんです、今どき紙をって言われたけど、唯一日本で部数を伸ばしている新聞社になります。今月間5,000部ですね。もうすぐ1万です。今日はお配りしてますけど、普段は販売してますので一気に伸ばして行ってます。みんなやっぱり知りたいんですよ。その中にはまあ多少なりともおばあちゃんたちの生き方とか歴史、考え方、そういうのをちょっと混ぜ込んでます。そういうのをほんとは若い人に見てもらいたいんだけど、一番多いボリュームゾーンはおばちゃんたちがすごいんです。20年先輩の

事業内容



●本社：福岡県うきは市浮羽町妹川4333-1
 ●福岡市支店・ばあちゃん喫茶：福岡市城南区梅林3-28-6（シェアオフィス&シェアハウス完備）
 ●福岡市早良区URしかた団地達酒店・ばあちゃん喫茶・春日支店・ばあちゃん喫茶：福岡県春日市漢吹北5丁目155

食品ブランド ばあちゃん飯



スタッフのばあちゃん手作りの料理を週販をメインに&マルシェ&イベントで販売。

ばあちゃんたちの得意と特性を活かした「食」と「料理」を商品・サービス化しています。昔ながらの懐かしさばあちゃんのを伝えたいことを目指しています。また、週末や平日の朝晩や週末料理をビジネスを通じて、商品化、流通させることで出回りたいという思いがあります。

自社メディア ばあちゃん新聞



月間5,000部発行の今、日本で一番伸びている新聞です。

テレビなどでも話題沸騰中の全国唯一の「ばあちゃん」を先駆者として創刊し続ける自社メディアの専門誌。一般のご家庭への定期購読を始め、スーパーや病院、介護施設や高齢、健康講座やカフェなど全国のあらゆる場所に置いてあり、発行部数よりも多くの人が手に取り読んでいただけていること、多くの西にはばあちゃん喫茶を営んでいたがいます。販売、印刷、万部発行を目指しています。

実店舗 ばあちゃん喫茶



6年目にして、ばあちゃんビジネスに遂にじいちゃんが加わります。

皆さまのオーナーのじいちゃんばあちゃんからの依頼もあり、皆さま高関の一部として、春エフに開設。自営わり店舗の候補のじいちゃんばあちゃん「今まで生きてきた人生を語る。生コンセプトに喫茶店を運営します。

2020年春より福岡県を中心に3店舗を展開予定ですが、福岡県内でもばあちゃん喫茶の自営わりが形式になっています。
 ●福岡県城南区梅林駅前
 ●福岡県春日市の住吉町
 ●福岡県早良区URしかた団地

ばあちゃんの学校 ばあちゃんデザイン賞



- ばあちゃん甲子園
- ばあちゃんフェス
- B（装）マーク認証

の二つの構成からなるリアルイベント。2020年の10月に第一回目を開催予定です。

ばあちゃん甲子園では、全国の一般のばあちゃんたちが参加の目的は、親と料理を持ち寄り「食」のコンテスト形式で評価。

ばあちゃんフェスでは、高齢者向け企業・高齢者向け多額多額にはを企画してイベント。シェアオフィスファッションショーやメイクアップショー、老人や専門業によりトークセッションを計画中です。

Bマーク認証では、企業が高齢者向けに企業・開発した新商品・開発商品に際して、商品やサービスを行うは必要の企業向けにばあちゃんフェスやネットワークを通じて、17歳以上の高齢者向け商品やサービスであることを証明し、Bマーク認証を付与します。

企業
自治体 への
団体
コンサルティング
シニアマーケティング

大企業、中小企業、自治体や団体への高齢者就労やシニアを対象とした企業などへのマーケティング支援を行っています。

資料 13

人たちがどういう生き方してるんだろうって形で、おばちゃんの女性たちがすごい読んでくださってます。

あとは、先ほどの喫茶店を展開してるのと、ちょっと今日お見せできなかったんだけど、「ばあちゃんフェス」っていう謎のイベントです。先月850人シニアを集めてファッションショーを甲子園とかでやったりして、まあこれもばあちゃんたちが集まる場、今日来る用事をつくるっていう形ですね。

最後、現場でばあちゃんたちが一生懸命働いたものから利益を上げて、若者がそれで食うっていうスタイルを僕が嫌っているので、僕らが考えているのが、若者は対企業から収益を上げて報酬にしようっていうのを社内の方針にしています。やっぱりお店でおばあちゃんたちが一生懸命やってる中から管理費をかすめ取るとかっていうよりは、それはおばあちゃんたちに分配して、僕らは僕らで大企業向けにコンサルとかシニアマーケティングとかをやって報酬を上げているというような仕組みになってます。

まあこういう形で今は都市圏にどんどん進出していますので、もう田舎だろうが都会のばあちゃんだろうが関係ないと、どこでもつくれると思っていま

す。まあ高知も中山間地あるし都市部あると思うんですけど、どこでもやれると思います。僕はたまたま田舎もんなんで、中山間地のばあちゃんのほうが確かに知恵とか経験とか豊富にあるので、その特性に合わせて仕事つくればいいだけですので、どこでもやれると思ってます。じいちゃんもそうですね。最初に言ったとおりばりばりのばあちゃんでも、別に忘れっぽい認知症のおばあちゃんでも別にいいじゃないかというところでやっております。

喫茶店で働いてる副店長の85歳のばあちゃんが、お店が嫌でやめるんじゃないで、ちょっと腰と膝が痛くて引退したいって言い始めたんですよ。「もうちょっと無理かも」つって。僕ばあちゃんにやめてほしくなかったんで、「ばあちゃん、何かほかに得意なことない」とつって言ったら、「裁縫が好きだ」つって言ったんですよ。あ、そっか。じゃあ、裁縫部隊つくて、ちょっとデザイナー的な発想なんですけど、牛乳パックを使って、僕とばあちゃんです洋服つくりますよっていう企画を立てました。もう実際つくってるんですけども、これが今企業さんが喜んでます。ばあちゃんに仕事もできるし、ト

イレットペーパー以外のリサイクル法を編み出したので、こういうバッグつくったり洋服つくったりして、このおばあちゃんには裁縫の仕事に切り替えてもらってます。たまたま70代80代のおばあちゃんたちに、日常的に裁縫好きって人が結構多いので、どんどん今仕事づくりを始めてますかね。そういう形でどんどん、別にアパレルがやりたいわけじゃないけど、ちょっとハイクオリティな、ばあちゃんに売れるやつをつくるってことで、着物を再生したシャツとかいろいろつくってます。

なので、そもそも僕が何かやる前、ばあちゃんとビジネスとか何も混ざり合わないって思われてたんですけど、ばあちゃん、じいちゃんもそうですけど、何でも混ざり合えますね。ほかの社会課題、認知症もそうですけど、デジタルを今度やっていきます。あと子どもとも相性いいですし、ちょっと Yankee は少し頓挫してますけど、ばあちゃんと Yankee も相性いいと思ってます。化学反応は起きなかったので、じいちゃんとばあちゃんだけちょっと失敗しちゃって、混ぜるなってことになってんですけども。

こんな感じではあちゃんといろいろやっています。もう昨日入って今日いろいろお話しただけでも、多分高知でも実際、やっぱりまあ中山間地だけじゃないと思うけど、中山間地の特におばあちゃんたち、いろんな知恵や能力持ってます。能力なくてもいいです、お話だけでもお金になりますので。ばあ

ちゃんと話したいっていうお客さんいくらでもいるので、相談したいとか昔の人の話聞きたいっていうのに価値を見出す人たちもいますので、それはやっぱりビジネス側がうまく組み立てればいいのかなど思っております。

すみません、ちょっと時間過ぎちゃったかなと思いますけれども、なんかまあ世の中の的には、僕の地域もシリアスで、何度も孤独死とかもうつらい現場見てきたんだけど、でも「助けてくれ」つっても同情してくれるかもしれないけど、誰もこの世の中助けてくれないんですよね。なので、僕はなんかちょっとふざけ、面白おかしく、おばあちゃんたち、おじいちゃんたち、人の温かみを伝えながらサービスとか企画コンテンツつくっていくと、高いお金払いたいっていう人たちが現れるなって思って、まあ課題解決をどっか明るく楽しくやっというていこうということで組み立ててやっています。

以上になります。すみません、時間過ぎてしまっ

(司会)

どうもありがとうございました。ほほほほびったりです。ありがとうございました。質問もあろうかと思えますけれども、2部の中で質疑の時間も持ちたいと思えますので、これから10分間の休憩に入りたいというふうに思えます。再開は、もう細かくて申し訳ないですが2時53分からということにしたいと思いますので、よろしくお願ひします。



第2部

パネルディスカッション

『『産業×福祉』という考え方をどう広めるか』

パネリスト

畦地 和也 さん（高知県自治研究センター理事・元黒潮町教育長）

山首 尚子 さん（土佐町集落支援員・元土佐町社会福祉協議会事務局長）

大熊 充 さん（うきはの宝株式会社代表取締役社長）

コーディネーター

野田 満 さん（さんぞデザイン共同代表・近畿大学総合社会学部講師）

（司会）

それでは、再開をして第2部に入らせていただきたいと思います。

第2部はパネルディスカッションでございます。まず私のほうから、コーディネーターとパネリストの皆さんをご紹介しますと思います。

〈コーディネーター、パネリストの紹介〉

この後の進行はコーディネーターの野田さんにお任せをいたします。よろしくお願いいたします。

（コーディネーター）

野田です。よろしくお願いいたします。パネルディスカッションは、「産業×福祉という考え方をどう広めるか」ということについて議論をいただきます。広めると一口で言ってもいろんなニュアンスがあるのかなと思います。それは思想・考え方だったり、



あるいは具体的な方法論だったり、あるいはもっと根本的な価値観みたいな話になるのかもしれませんが。先ほど基調講演いただいた大熊さんを迎えて、地元からもこのテーマを議論するのにびったりなパネリストの方に登壇いただいているという感じでございます。

先ほど、それぞれ自己紹介していただいたと思うんですが、自己紹介の追加とかあればというお話と、あとはその基調講演を受けてのコメントだったり、ご自身のそれぞれのお立場からの問題提起といえますか、そういったコメントみたいなところも交えてお話いただければと思います。それでは、山首さんのほうからよろしくお願いいたします。

（山首さん）

皆さん、こんにちは。紹介いただきました山首と申します。私は土佐町の生まれで、土佐町で育て、土佐町でおばあちゃんになりました。山首というのは、実は土佐町の姓じゃなくて愛媛県大洲市の主人の名前で、どんぶらこっこと仕事に来た若者をピッと捕まえて地元にもそのままいるという、「マスオさん状態」のおうちで私は生活をしていました。

社協というところで仕事をさせていただいて、退職して、今があります。畦地さんは以前から役場職員の頃からずっと存じ上げていまして、今日は、お声をかけていただいてこんな場を与えていただきましたこと、ほんとにありがたく思っています。

私は社協というところでずっと福祉の仕事をして



きてたんですが、社協というのは、地域福祉といって、地域の人たちと一緒に、地域でどうしたらみんなが幸せにやっけていけるかということをやっけていく団体なんです。私も社協に入って、いろんなことをやっけてきました。

ふと考えてみれば、今大熊さんの考え方とすごく似てることをやっけてきたなというのが正直なところなんです。まずは、介護保険制度が始まる前、高齢者がこれからどういうふうにしていくかというときに、今まで介護保険じゃないサービスで受けていた人たちがこれから行けなくなる、どうしたらいいかっていう問題に直面しました。介護区分ができますから。そんなときにどうしたらいいかっていうことを議論し始めました。そこで、土佐町内に高齢者の人たちが高齢者の人たちをみんなで支え合う拠点、「とんからりんの家」というのをつくって、そこを高齢者自身が運営していくという施設をつくりました。そのときデイサービス事業とか介護予防事業とか、いろんな事業がいっぱい始まっていたときですので、地域の方がボランティアで、しかも高齢者が介護予防の事業を自分たちで運営してやるなんてことは、まあほぼなかった事例でした。介護施設のデイサービスの職員から、「うちのお客さんが減るやいか」、「なんでそんなことボランティアでやるがで。これは行政のやることやないか」と言っけて、いろんな批判を受けたことを覚えています。

それをやっけていったのも、実はこれからの地域をどう考えていくかっていうときに、高齢者の人たちとワークショップをずっとやっけてきたんですね。その人の中の1人から、私は高齢になっけても、私が役に立つ場所をつくっけておきたいという声があったんですね。それがどういうところかっていうことをみ

んなで議論して、「とんからりんの家」というのを立ち上げたんです。立ち上げた結果、「とんからりんの家」も、もちろん気持ちはボランティアで行くんですけど、利用料ですとかいろんな事業費をかき集めてやっけていくと、年末にボーナスが払えるようになったんですよ。小さいボーナスが年に1回もらえるんです。ほんとに10万円とかですが、もうそのもらえることがすごく励みになったというお話をお伺いしました。そういう拠点ができて、そういう場に介護予防の視点で研究に来てくださった先生方とか、いろんな方のご支援を受けて「とんからりんの家」を立ち上げてきました。

それから、もちろん社協というところには、専門職といわれるいろんなワーカーがいます。社会福祉士もケアマネージャーもいるし、支援側の職員がいっぱいいるんです。そういう職員が支援、支援、支援って毎日言っけてるんですけど、本当に当事者は支援されたいのかといっけたら、そうではないんですよ。なので、私たち社協としていろいろ考えていきました。社協で困った人にお金を貸す事業もやっけてきました。けど、最終的にこの人にお金を貸すことが本当にこの人の支援になるんだらうかということ、もうそれやめて、社協に仕事に来てもらいうことにしました。「お金払うきどうぞ、どうぞ仕事に来てください」と言っけて、社会参加応援事業という事業に名前を変えて仕事をつくっけて、「今日はどこ行きゆう」って聞かれて、「うん、社協へ仕事に行きゆう」って言えるようなそういう場をつくりました。その仕事をしている間にコミュニケーションをとっけて、この人と一緒に何をしていくかっていうことを考えて、事業をやっけて、ありとあらゆることをしました。たとえば、すごいきれいなお茶畑があったんですが、お茶畑がもう高齢でできなくなっけて、それがもったいないので、どうにかしたいという相談を受けました。じゃあということで老人クラブさんをお願いしたところ、みんな自分とこでお茶をやっけてるんですよ、だからもうお手のもんで、老人クラブみんなでお茶を育てて、老人クラブでお茶をつくっけて販売しました。それを老人クラブの収益にしたり、いろんなことをやっけてきました。

福祉というところで仕事をしていて、今は集落活動センターです。厚生労働省から総務省の管轄の仕

事になってるわけですよ。集落活動センターで、地域の人たちの声を事業に変えていくっていう役割をしています。こんなことやってみたいね、あんなことやってみたいねっていうそういう声が上がったら、「うん、やってみよう」って取り組んでいます。うち今、集落活動センターで井上ワイナリーさんのブドウの栽培を始めてるんですよ。私、実は小さな燻製器で燻製やってるんですが、うちの集落活動センターの高齢者の会員さんが「いや、えいですね。チーズでも燻製にしたら最高ですね」と言うんです。「それはえいね。ワインと燻製のチーズ合うやんか」ということで、じゃあ今度ワインと燻製チーズの会をやろうみたいな、そんなノリでどんどんいろんな事業をやってきています。そういうコミュニティ・ワーカーという仕事を社協と集落活動センター両方でやってるわけです。

だから今、大熊さんのお話の福祉っていうものどう向き合ってきたのかという話については、私は分かるというか、もうほんとに頷く話ばかりでした。視点が違うというところもそうですけども、高知県下に集落活動センターは67か所あります。集落活動センターは、考えてみればまさにこのうきはの高齢者ビジネスの場なんですよ。そうですね、活動センターでお寿司を売ったり、観光客が来たらそれをおもてなししたり、そういうことをして仕事でお金をもらえるっていうのが集落活動センターの仕組みですから。まさにこれはうきはのやり方を少し考え方を考えるだけでいけるんじゃない、「各地でやってるやん、高知」みたいな、そんな印象を受けました。

今日呼んでくださったときに、最初に思ったことがあります。それは、私今64歳なんですけど、64の私がこれからの自分をどう考えていくのか、ほんとにどういうふうにこれから老後に向かっていくのかということです。仕事をするのか、おうちで手芸するのか、まあいろんな生き方があると思いますが、これからの私の生き方を、仕事っていうところをどういうふうに捉えていくのか。私らの年代にとってこれすごく大事なことやと思ひながら聞きました。また、これから皆と一緒にいろんな話をしていきたいので、会場の皆さんもぜひよろしくお願ひします。

(コーディネーター)

ありがとうございました。ずっと現場の最前線に取り組まれてきたということで、引き続きまたよろしくお願ひします。

続きまして、畦地さんのほうからも、今お手元のレジメでちらりと触れられてはいるんですが、そのあたりも含めて少しお話いただければと思います。お願ひします。

(畦地さん)

黒潮町から来ました畦地と申します。ちょっと初めに、隣の山首さんは元社協の職員ですけども、今日参加者の中で現役で社協の職員とか、あるいは老人ホームに勤めてるとか介護保険関係の仕事をしているとか、まあ高齢者福祉という言い方をしましょうか、その現場で、専門職なり、それに近い形で働いてる方おられるでしょうか。

お一人、お二人。ああ、ありがとうございます。実は今日の話は僕は、そういう方に一番聞いてもらいたいんですよ。大熊さん、まあビジネスという切り口でお話をされますけれども、それはあくまでも入り口であってね、その目指してるものは何かっていうと人の幸せなんですよ。だから一番聞いてもらいたいのは、そういう現場で今働いてる方なんです。そこに考えが至ったということについて少しお話をさせてもらいたいと思います。

私は46年間、元は大方ですけども黒潮町の役場に勤めまして、昨年退職をしました。今は特に何もしてないんですけども、20年前からこの自治研の理事をしております。その当時から、理事兼研究員で研究をし始めたんですが、最初は、まさしく地域地域で小さなビジネス、コミュニティビジネス、これ



を高知県はつくるべきではないかという研究を始めたんですね。

そのために、特に庭先でつくってるような野菜、つくるとはできるんだけど出荷ができないっていう高齢者がたくさんいるという状況を見たときに、じゃあそれを集めてあげればずっとつくれるんじゃないかということで、庭先集荷をベースにしながらコミュニティビジネスの研究を行ってきました。だんだん、働けるということは、自分がそれぞれ持っている知識や技術を止めなくていい暮らしができるということで、これがいかに大事かということに気づいてきたんです。5年間研究をしたんですけども、そのときの報告書を久しぶりに見ましたが、途中から産業福祉という言葉が出てくるんです。最初からは出てこないんです。すべてタイトルはコミュニティビジネス研究なんです。でも、中身は産業福祉の研究でした。途中から気がついたということなんですね。

2007年の報告書のはしがきにこんなこと書いてます。「研究からは以下のようなキーワードが浮かんできた。生きがいづくり、健康づくり、寝たきり予防、地域での見守り活動、地域産業の振興、地産地消、耕作放棄地の利活用、コミュニティの活性化、地域間交流等々である。」そういう視点で見ると、どうも今我が国がやっている高齢者福祉というのは、保護は一生懸命するけれども、本人たちの持っている力を活かしてあげようという視点が足りないんじゃないかという疑問になっていたわけですね。なので、我々は、じゃあどういう事例が全国にあるのかというのを見たり、あるいは直接アンケートをしたり、さっきの庭先集荷のデータを蓄積をして、それに参加する前と参加した後で本人の意識や健康状態、病院に通院する回数がどう変わったかとか、そういうものを全部データとして集めたりしました。そしてこれは確かにやっぱり違うと。自分でつくったものを取りに来てくれて出荷できる、それがすごく生きがいになって元気が出るっていうことがだんだん明らかになってくるわけですね。というふうな研究を5年ぐらいいやりました。

けれども、その中でやっぱり大きな壁がありました。申し訳ないんですが、福祉の皆さんの意識ですよ。上勝町の「葉っぱビジネス」をやった「いろど

り」があるでしょう、あそこに行ったんですね。横石さん、残念ながら今年の夏にお亡くなりになりましたけど、横石さんにお話を聞きました。いろいろ始める前と後では、上勝町の高齢者の医療費は下がってるんだと彼は言うんですね。その後、役場の担当者に聞きました。すると、「それは関係ありません。」ともうけんもほろろです。ところが、その後、出荷者のおばあちゃんに話を聞きに行ったんです。針木ツネコさん、当時85歳でした。もう100歳を超えてますからもう多分お亡くなりになってると思いますけども、針木のおばあちゃんがこう言ったんですよ。「わしゃあ、もう毎日毎日葉っぱで忙しい。ところが、役場の職員が来て、『おばあちゃん、もうそんなことやめてデイサービスに行きましょう』って誘われて困る」って言うんですよ。

当時の上勝町、地区を5ブロックに分けて毎日、土日も含めて毎日地区にバスを出して、高齢者をバスに乗せてごそっと高台にある施設で、朝から夕方までお風呂に入ったり、ご飯食べたり、ゲームをしたりして1日過ごして帰ると、そういうサービスしてるんです。そこにも見に行くと、いろんな人に聞きました。これが楽しいという方もいます。それはそれで大いに結構、僕は否定しません。でも、針木のおばあちゃんのように、葉っぱが楽しいということをやめさせてまで、デイサービスになぜ連れて行かなくちゃいけないんですかっていうことです。申し訳ないけれどもこの数年間にそういうのをいろんなところで見聞きしたんです。これを何とかしなくちゃいけないと思ったんです。

ほんとに福祉ってじゃあ一体何なのっていうことでしょう。できることをやめさせて保護すること、チャリティが福祉、それだけが福祉なんですかっていうことを、問題にしながら研究をしましたけれども、私たちも、そもそもこれ専門じゃないので、2010年の研究の報告書を最後に研究が終了して、自分の中では課題意識を持ちながらこの十数年過ごしてきたわけです。

ところが、大熊さん、NHKのラジオ出演いつでしたかね。

(大熊さん)

もう出演しすぎていつか忘れちゃった。

(畦地さん)

1年ぐらい前でしたかね。NHKの番組聞いてましたら、福岡ではあちゃんビジネスをしている人の話が出てきました。それが若い人で、九州からわざわざ東京のスタジオまで来ていて、当然僕は電話だろうと思ったら、特急で来てしゃべってるということでした。さっきのバイクの事故とかの話も聞きました。今こういうビジネスをしてますということで、それをずっと聞いてたときに引き込まれて、ああ、これは自分たちがほんとに求めていたあの姿をこの青年は実現してるんだとすごく感動したんですよ。僕は理屈で終わりました。机上の論理で終わって、ただ紙に、こんなことやりました、調べました、見聞きしてきましたしか書いてないけれども、彼はそれを具体的にビジネスとしてやってる、すごいなあと思ってたんです。そんなことがあって、この今回のシンポジウムの企画を立てるときにふとそういうことを思い出して、事務局にネットで調べてもらって、大熊さんと連絡が取れて本日があるということなんですね。

そういう意味では、ほんとに時代を切り開いている大熊さんだなんて思っていて、今日も午前中の打ち合わせですごく感激をしながらお話を聞いてました。大熊さんは、デザイナーですよ。

(大熊さん)

はい。

(畦地さん)

社会の課題を解決するのがデザインです。きれいな絵とか形のええものをつくったりね、それがデザインじゃないんですよ。そこには基本的なしっかりした考え方があって、それを形にしたり仕組みにしたりシステムにする、これがデザインですから。そういう意味では僕は、彼は本物のデザイナーだなんて思って話を聞かせてもらいました。これが感想の1つです。

(コーディネーター)

ありがとうございました。先ほどの山首さんの取り組み、問題意識であったり、そして先ほどお話しいただいた畦地さんの実証実験を通した一連の研

究、要はそのでの仮説のようなものを、図らずとも九州の地で実践されているというようなところでのご縁かなと思います。先ほどありましたように福祉だけが悪者だということではないんですが、まあ一方で「産業×福祉」という今日のテーマを考えたときに、その福祉という分野と、産業、言い換えればビジネスだったり、経済的合理性だったり、収益性みたいなものについて、社会はまあ結構長い間、それこそ大熊さんの言葉からすると「混ぜるな、危険」と言われたような領域にあって、ただもうそうは言っていられないということなんではないでしょうか。

実は隠れた絶大なシナジー（相乗効果）があることについて、長い間見て見ぬふりしてきたような中において、先ほど福祉のお話もありましたが、少しビジネスの側からちょっと大熊さんに改めてお伺いしていきたいなというふうに思います。おばあちゃんたちの生きがいがいたり、そういったものを、舞台をつくってあげるといことと、一方で、ビジネスである以上はそこにやっぱり需要がないといけなないといひますか、カスタマーがいないといけなないわけですよ。そのあたりのつなぎ方について、講演でも少し触れられていたかなとは思いますが、いま一度ご解説といひますか、コメントをいただければと思います。

(大熊さん)

ありがとうございます。その前に、ちょっと一つそうだなと思ったのが、畦地さんがおっしゃったところですね。やっぱり今もろもろこの国のバランスが崩れてます。おっしゃったとおり福祉が悪者だっで全く思っでなくて、絶対必要なインフラなんだけれども、今ちょっと変わらなきゃいけない時代とか環境に来てると思ひます。先ほどのお話ですと、僕デザイナーなので、掛け合わせなきゃいけないんじゃないんですかってところに来たんじゃないかなと思ひます。やっぱり従来の福祉だけではもう実際もたないでしよっていうところなんですよ。畦地さんもおっしゃったとおり、当事者の方々にとってもそれがほんとにいいんですかってところは突き詰められてると思ひます。

僕も福祉専門職やっでないけど、普段から多くの現場に足を運んでますので、ちょっと福祉のあり方

に少し混ぜ合わせています。まあ別にビジネスじゃなくてもいいけれども、そういう時代が来てるのかなと思っております。ほんと僕どちらかというとビジネス側なんです。今日はこういった一番僕が一生懸命やってるところで呼んでくださって、こういう議論ができることはうれしく思っています。なんか僕は普段は、スタートアップ界隈のAIとかロボットとかそういうところに混ぜ込まれていて、変な高齢者を対象にしたところのジャンルに置かれてるんです。

すごく事前打ち合わせでも盛り上がったんですけども、一生懸命僕が今行こうとしてるところには、国全体、市民、国民としてはまだそこには気づいてないのですが、基本はやっぱりビジネスだと思うんです。おっしゃったとおり、デザイナーは社会の課題を解決する、地域の課題を解決するんです。もともと僕は企業の課題を解決するとかやってましたけれども、ビジネスも本来そうだと思います。ビジネスは、物を売ることとか経営者が儲かることではないですよ。ユーザー、人々が課題に抱えているものをサービスとか物によって解決しようっていうことが、本来ビジネスの意味でもあるんですよ。

それが今なんかソーシャルビジネスとか社会起業家っていうジャンルになってるけど、そうじゃなくてビジネスって何なのかってそもそも考えると、誰か困ってる人が助かる発明とかサービスをつくろう、仕組みをつくろうってところだと思います。もしくは、徹底的にお客さんを喜ばせる、感動させるということを純粹にやってるっていうところであるんです。そもそも僕、何かお客さんにこれを売りつけたっていう動機がないんですよ。お客さんが喜んでくださるんなら、何でもいいと思ってて、鉛筆とかシャーペン売っててもいいんです。たまたまおばあちゃんの得意のやつで、お客さんが喜ぶようなやつを見つけてきてるんでして、これもデザインとビジネスを掛け合わせたっていうものです。

今でこそ僕はこんな場で話してますけど、相当なあんばいなんです。中卒ですし勉強もできないけれども、純粹に本質的なところを見極めてそれを世の中に出してるっていうところですね。ですので、ビジネスを複雑に考えると複雑になってくるけ

れども、基本は誰かが困ってるのを解決して、そこに仕組みを乗っけるんです。お金を稼ぐのは全然悪いことじゃないので、ボランティアももちろんいいことなんですけど、その困ってる人を助け続けるのにこの国はお金が足りないんですよ。人も足りなくなってきました。じゃあより良い仕組みをつくらうということです。それは合理化の意味じゃないですね。地域には合理的にできないものが残ってるんですよ。なので、誰も手をつけないのをあえて少し合理的になるように仕組みでやろうっていうのが私の考えです。そういうふうにビジネスを使っています。

(コーディネーター)

ありがとうございます。まあそうした中で先ほどの講演にもありましたとおり、月に2~3万円の収入が乗っかると、生活が楽になる、ハッピーになるという話がありました。このあたり、畦地さんの例の研究なんかでもほぼほぼ同じような見解が得られたみたいな話をお伺いしたことがあるんですが、ちょっとそのあたり研究の結果も含めて解説いただけますでしょうか。

(畦地さん)

ちょっと、資料ではその箇所がどこかわからないので、記憶でお話しさせていただきます。

(コーディネーター)

はい、お願いします。

(畦地さん)

ピーク時庭先集荷をする人が100人近くいたんですね。その方たちにいろんなアンケートを取った時に、これでお金を得られるけれども、あなたはそもそもどれくらいプラスあればいいんですかって聞いた時に、今言った2~3万円が一番多かったんです。それはもともとのその本人の年金の額の高低関係なくです。関係なく、あと2~3万あればちょっと楽になるんだけどみたいなのが一番多かった。ですから、打ち合わせのときに資料を見させてもらったときに、あっ、一緒だなと思ったという話です。



(コーディネーター)

理論として正しかったんだっていうようなところですね。このあたりの、要はおばあちゃんたちの経済感覚というか、そのあたりって山首さんの感覚としてはいかがですか。先ほどいろんな取り組みなされている中で、ボーナスみたいな話もありましたけど。

(山首さん)

やっぱり中山間地域の高齢者の方、ほとんど国民年金でやってこられています。月5~6万くらいとかですよ。実はその5~6万で息子たちが出て行った集落で1人で暮らすと、地域の方が亡くなったときの葬儀へのお供えとか冠婚葬祭の費用だっすごいんですよ。実際しんどいです。そんな方がやっぱり畑で野菜を育てて、ちょっとでも良心市で売れたりすると、大きいんです。また、自分ところの食料にしたり、まあそれを例えば子どもたちに送る、お金は送れんけど、野菜が送れるんです。

そういう暮らしっていうのはすごく大事です。そこでお金を稼ぐっていうところでどれだけ価値を生むかっていう判断なんですけれども、実は土佐町なんかでも、デイサービスへ行くよりも膝ドロドロにしながら畑を這いずって、毎日草取りをして畑やってる人がいるんですよ。社協にも、野菜を育てる畝を立ててもらいたい、「畝立てをようせんき、それをシルバー人材センターの人を雇って畝を立ててくれ、ほんなら私は野菜を育てれるき」ってと相談が来て、その仕事をしてくれる高齢者もたくさんい

ました。

けれど、今土佐町では、そのシルバー人材センターのメンバーさえもいなくなってきて、その派遣ができないような状況になってきたんです。ですから、もう2~3万あれば生活ができるので畑もやっていたんですけど、そういうサポートさえできなくなってきています。これはもう例えばこのシルバー人材センターの制度とか、今の社会保障の制度ではその隙間がありすぎて、実際の私たちの暮らしの生活に合わなくなってきています。

その中であと2~3万どうやって稼ぐのかということですが、実際中山間地域での一番の問題は送迎です。そこに働きに行こうにも車がなければ行けません。農協が「集荷があるき来てくれ」っていうんですよ。生活が困窮している人でどうしても仕事があったっていう人を送り迎えしなくちゃいけない。送迎して仕事をしていただいてっていう、そんなことも社協がやってました。だから、その2~3万っていうのは非常に生活にとって大事です。

(コーディネーター)

ありがとうございます。まあそうしたその2~3万円、まあ人によってはもうちょっと多く5~6万、8万という方もいるというようなお話、講演でもありました。先ほどありました生活、あるいは冠婚葬祭、また余暇にも使うっていうこともあるかと思っています。活躍っていうのは1つキーワードですけども、そのおばあちゃんたちの活躍って、稼ぐこと以外にもその地域経済を回す消費者としての

活躍みたいなものもその先には描きたいなっていうような青写真を何となく僕も持っています。そこで再びちょっと大熊さんに、そうしたお金っていうのは、そのおばあちゃんたち地元とかでどういう使い方をしてるのかとかをお聞きしたいなと思います。

(大熊さん)

一番最初の頃は手渡しで渡していて、まあ喜んでくれますよね。あとはなんか、最初は地元だけだったんで、大熊君の会社に午前中だけ行くと数千円もらえるぞみたいなのが地元を広まって、話題になったりしてたんですね。これはやっぱり全員が全員じゃないですけど、「うちで稼いだやつばあっと全部使っちゃって」っておばあちゃんたちには乱暴には言ってるんですけど、ほんとにおばあちゃんたちもいろんなタイプいますので、たくさん声は聞いてるんです。自分のことに使うんじゃないで、孫になんかこれ買ってあげたい。何か月間分貯めて自転車買ってあげたんだってお話があったりします。まあよくあるのが結構旦那さん亡くなられてお一人暮らしのケースが多いんで、仏壇にずっと置いてる人もいますし、あと息子さんとか娘さんに買ってあげたっていうのが多いですね。中には自分にご褒美系の人もいます。もうお酒ずっとやめてたんだけど、大熊君ところで働き始めたらちょっとお酒を再開させたとかいう話もありますね。

(コーディネーター)

晩酌ができるようになったんですね。

(大熊さん)

はい。うち結構おばあちゃんたち仲良くて、車がなかったりしたら、地元のお祭りとかに一緒にばあっと飲みに行ったりします。これはちょっと僕がおごらなきゃいけないんだけど、今月も焼肉にみんなを連れていきました。

かつかつでやってるんで、なんか予定しないお金が働いて入ってきたんで、ばあっと使う系のおばあちゃんもいます。生活の足しにする人もいれば、いろんなおばあちゃんたちがいます。ほんと驚くのが、やっぱり子どもとか孫に何かしてあげたいっていう気持ちの人結構いるんです。家族思いの方々が

多いなという印象です。

(コーディネーター)

ありがとうございます。ちょっとまた別件ですけど、よくあるジョーク話です。とある町に直売所かアンテナショップができて、それこそおばあちゃんたち、庭先集荷みたいな形で結構儲かったときにどうなったかという、村の美容院が一番儲かったっていうんですね。これさっき大熊さんの話にもちょっと関連するかなと思うんですが、まあ都会のアンテナショップ、かわりばんこでおばあちゃんたちが店頭立つてっていうのは、もうなんかニューヨークみたいな感じなんですね。きれいにしておめかしをして、先ほど90歳のおばあちゃんの写真ありましたが、なんかそれで村の美容院が儲かったみたいな話があって、まあ何が言いたいかっていうと、繰り返しになっちゃいますが、要は派生需要ですよ。一定のインカムを得たおばあちゃんたちが地域で使うことによって、また地域経済を回す1つのトリガーになり得るみたいなことは、産業福祉の次のシナリオとしては、結構ちゃんとポジティブに見るべき部分かなというふうに思ったりもしました。

(大熊さん)

すみません、1つ大事なこと今日話していませんでした。

(コーディネーター)

どうぞ。

(大熊さん)

僕、ずっと現場にいて、実践プレイヤーなんです。畦地さんもすごい研究されてるんだけど、僕も唯一研究したことがあって、やっぱり収入と働きがいとか生きがいがあれば、おばあちゃんたち幸せなんだって思ってたんですけど、この7年の賜物で分かったことがあって、今ほんと重要なこと言われたと思うんです。言うの忘れてたんですけど、実は収入よりも、まあ仲間もいいでしょう、お客さんもいいでしょう、それはそれで生きがいかもしれないですけど、これおばあちゃんたちには、実はもっと上の概念があったってことに気づきました。それは美

しとか、健康とかです。お金よりやっぱり健康のほうが高いですね、よく、いわゆる金力よりも筋力とかって言いますよね。なので、美容とか健康のほうが関心と優先順位高いっていうことがこの7年で分かってきました。なのでそっちのほうがわくわくしたりして興味があるんだなと思って、ファッションショーとかそういうちょっと違うこともやり始めてるんですよ。まさしく使ったお金を美容に使う。いいことだと思いますよね。

(コーディネーター)

ありがとうございます。そうですね、ちょっとここから制度の話とか、社会全体を取り巻く話に少しずつ移っていければなと思っています。今日のお話の中に、初めてお伺いする地域で、社協さんだったりに頼って、地域のおばあちゃんに、口づてでネットワークを広げていくみたいなお話がありました。これは畦地さん、あるいは山首さんへの質問になるかなと思うんですが、ちょっとざっくりとした質問になっちゃうんですけど、実際高知の現場で社協さんだったり、自治会だったり、高知では食会と呼ばれているらしいですが、食審会などの地域の組織、団体の現状というか、大熊さんたちのあいったアプローチに対しての対応などについてなんかコメントがありますでしょうか。

(山首さん)

そうですね、地域のことは社協に聞けと言ったほうが早いです。大体私たちも大学生とかインターンとかいっぱい受け入れて、それから移住者の方とかいっぱい受け入れるんですけども、地域のことを聞きたかったら、まず社協に行ったほうがいいよという話はします。社協というところはいろんな団体ともネットワークが取れてます。あと食会さんですね、食会さんは、実は役場の中では福祉課に事務局があったりするんですよ。今集落活動センターにいるんですけど、食生活改善推進員さんがいる地域は、地域で食べることができるんですよ。やっぱりお料理をするのに集まる女性たちがグループ化してるので、何かやりたいって言ったときに食会さんがいるかどうかというのは大きいんです。実は私のやってる集落活動センター森には食会さんが集まる

っていうところがなくて、私たちの森では実は大人食堂とかはできないんです。ほかのところはできたりするので、食会さんの力とかはすごく大きいですね。

(大熊さん)

いろんな地域に進出してますので、あるとき気づいたのが、うちの店長とかリーダーのおばあちゃんたち、みんな食会の会長出身だったんですよ。

(山首さん)

食会さんですよ。

(大熊さん)

今は分かったんですけど、もうみんな食会の人やみたいな感じで、当時衝撃を受けました。

(山首さん)

なんでやと思いますか。女の人同士がご飯をつくるって大変なんですよ、切り方ひとつ違うので。でも食会さんって、集まってリーダーさんがいうメニューによってばあってつくるっていうそのやり方に慣れてるんですよ。ほんと最初は、「そんな切り方したらいかん」、「これちょっと大きい」って言われて、「あんなに言われるがやったら私嫌や」って言って退いていく女性がいっぱいいるんです。だけど、食会さんはそういう経験をずっと積んできたので大丈夫です。みんなで集まって1つの料理をつくるという、このシステムに慣れているので、だから、よし、ほんならそれ手伝いに行っちゃうよって言えるんですよ。なかなか人の料理を手伝うって難しいですね。女性の方分かると思うんですけど、そこなんです、ポイントは。

(コーディネーター)

ありがとうございます。畦地さんのほうからも、先ほど研究の話もありまして、その中ではいろんな当時の先進事例もいろいろ視察して回ったみたいなお話も聞いたことがあるんですが、そうした中で、要は当事者のおばあちゃんたち以外の周りの地域の登場人物とかってというのはどういった方が、重要だったかみたいなことについて、少し思うところがあ

ればコメントをいただきたいなと思います。いかがでしょうか。

(畦地さん)

先進事例っていうよりも、これがやっぱり現実なのかと思う事例が1点あるので、それをちょっと当時の資料を見ながらお話ししたいなと思います。

(コーディネーター)

お願いします。

(畦地さん)

昭和51年に国土庁、今の国交省ですね、それが高齢者生産活動センター建設モデル事業というのを実施してるんです。このモデル事業の実施要綱をちょっと読みますと、「山村地域においては、近年の国民経済の急速な発展に伴って人口流出が以前続いているが、人口減少を内容的に見ると、若年層の著しい減少が見られる反面、高齢者が増加しており、人口の高齢化が急速に進行している。今後、山村地域人口の高齢化の傾向は一層進み、深刻な高齢者問題は広範化するものと考えられる。この問題に対処するためには、安定した老後生活を支える所得対策、健康な生活を送るための医療対策、老後の生きがいを高めるための就労および余暇対策等、各分野における施策を総合的に推進する必要がある。」中略します。「本事業は、山村地域における高齢者の就業機会の増大を図り、その生きがいを高めるための生産活動施設として、高齢者生産活動センターの建設・整備を実験的に実施し、この種の事業の手法と効果を明らかにしようとするものである。」これ国交省ですよ。厚生労働省でも経済産業省でも農林水産省でもない。今でいう国交省ですね。当時の記録では全国で29できてたんです。我々がこの調査をするときに調べたとき、唯一残ってるのが茨城県の旧里美村というところでして、話を聞きに行きました。そこでは、高齢者がそこに来て、わら細工をしたり、お米をつくったりしながらいろんな生産活動をして時給を得てるんです。でも、ここも合併するんです。里美村現在は常陸太田市です。そうすると、それまで問題にもならなかったことが問題化してくるんですよ。赤字だとか、それは、福祉なの

か、産業なのか、どっちなんだと。その後どうなったか知りませんが、このとき、存続の危機にあるって書いてるんですよ。

このときにここの施設の職員のキクチミドリさんという女性の方に聞いた話です。それは、以前会員でトヨダさんという88歳のおじいさんがいて88歳の米寿のお祝いをセンターでみんなでやってあげましたが、その後すぐにやめたそうです。やめた理由は、「もうお父さん、やめなさい。恥ずかしい」と娘さんの反対にあったからです。年寄りを90近くまで働かせるということで、無理やりやめさせられました。しかし、トヨダさんは、やめてからすぐに亡くなりました。ミドリさんは、「トヨダさんは、ほんとにここへ来たいと言ってた。正月でセンターが休みになると体が痛くなる。暇なときは病院にでも行くかとよく言っていました」と教えてくれました。「本人はもっとここに来て仕事をしたかったんじゃないでしょうかね。来させてあげたかったのにね。」というコメントもありました。

ここで僕が言いたいのは、冒頭言ったように、1つには、本人はしたいのに家族や誰かがそれを奪ってませんかということです。そして、昭和51年というのは50年前でしょう、その頃から人口減少、高齢化になることによる弊害にやはり危機感を持っていた人が国の役人の中にもいたということです。

(コーディネーター)

当時からいらっしゃったんですね。

(畦地さん)

当時からいて、だから解決するために1つ実証実験をやってみたらどうかと思ったんですけれども、そういう流れが続いていない、続かないというのはなぜなのかっていうことです。50年経ってもそれが具現化されていない。つまり産業か福祉か、どっちなんだって。高知県の「集活」(集落活動センター)は産業でしょ、「あったか」(あったかふれあいセンター)は福祉でしょ、どっちなのこれはって。なんか似てませんか、どっちだっていいのに。

(コーディネーター)

まあそうですね。

(畦地さん)

当の利用者は、今日は集活に、今日はあったかに行く日というように、今日はどこそこに行く日って言うてるわけで、だから「かける」なんですよ。「かける」であって、「足す」じゃない。1個でも「かける」なんですよ。僕はやはり高知が高知型福祉って言うてるんだったら、この概念が必要なんじゃないかなと思います。ほんとに中山間地域も人が減る中で高齢者がどんどん増えていきます。高知県らしい福祉って言うのは、働くことこそ人の幸せになるという基本的な理念、それを大切にして産業であり福祉を展開しなくちゃいけないんだなと思います。

さっき大熊さんが坂本先生の『日本で一番大切にしたい会社』の話をちょっとしましたけども、その坂本さんが当時書かれた『日本で一番大切にしたい会社』の一番最初に出てくる会社が日本理化学工業という会社です。知ってますか。チョークをつくる会社です。ここは7割が知的障害者なんです。福祉施設じゃないですよ、会社です。ちゃんとした給料を払って知的障害者を雇っている会社、その大山さんが書いた本です。もう大山さんは亡くなりましたけども、その大山さんが言うてることはこういうことなんです。人の幸せ、究極の幸せは人に愛されること、人に褒められること、人の役に立つこと、人から必要とされることの4つ、働くことによって愛以外の3つの幸せは得られるのだと。私は、その愛までも得られると思います。さっきの美容院に行くというのは、やっぱり褒められるからですよ。「おばあちゃん、きれいになったね」って。そういうことじゃないですか。

だから、例えば大山さんのようなこの理念をしっかりベースに持つことがほんとに必要、人の幸せってほんとに何なのって考えたときに、それはチャリティではないってことですね。先ほどのようにチャンスをしっかり与える、機会をしっかりつけてあげること、これがやはりほんとの福祉なんだというのを私は切に言いたい。なので、さっき冒頭言いました、一番話を聞いてもらいたいのは、できたら福祉関係者の方だというのはそういうことです。

(コーディネーター)

ありがとうございます。今多分重要な論点が2つあったなと思っています。1つは、縦割りみたいな話はよく聞かれますけど、確かにそのおばあちゃんたち当事者にとっては、その管轄がどっかってのはまあ関係ないわけですよ。ちょっと仕事に行くって言うのは、集落活動センターが中山間地域振興対策課の所管でみたいなところは関係ない話なので、そこはやっぱりきちんと真っ正面に寄り添う必要があるみたいなところが1点です。もう一つがやっぱりビジネスのところ。まあちょっと繰り返しちゃうんですが、そのあたりもう少し大熊さんにお伺いしたいなと思っています。雇用形態が委託が中心だみたいな話があって、まあおばあちゃんたちによって違うんでしょうけど、その働き方としては、のびのび働いているみたいなイメージなのか、従業員として、ビジネスとして、顧客がいるからちゃんとやってくれみたい結構厳しくみたいなイメージなんでしょうか。

(大熊さん)

そうですね。唯一うちが条件出していて、一番最初に明確にしてるのは、お客さん商売をやってるんで、お客さんを喜ばせるのは絶対にやるんだよということです。いろんな状態のおばあちゃんいるんで、状態によって座ってやってもいいんです。でも、お客さんを喜ばせるのは絶対にやるんだと。それが抜けたら、僕らやっていけなくなるので言うんです。これ、みんな分かりますよ。かつ、おばあちゃんたちのおもてなしすごいです。みんなお客さんたちを喜ばせようとしてくれます。といっても中にはたまに、今日は話さなかったけど、お姫様ばあちゃんって、まあわがままで、自分が一番じゃないと駄目、私が一番ちやほやされたいっていうおばあちゃんもいるんですよ。そういうのはもう最初から合わないよねっていうことです。あくまで我々仕事でお客さんを喜ばせて、あなたがちやほやされるのがメインじゃないっていうのを明確にしています。

もっとびっくりされるのが、80歳90歳つかまえて粗利とかの話するんです。ちょっと驚かれるかもしれないんですけど、今日僕ここに来てますよね、ば

あちゃんの経営管理下でやってるんですよ。ちょっととんでもないことやってるって言われてるけど、ばあちゃんにパソコンを教えます。パソコンまでも駆使して、エクセルに今日の売り上げとか目標値とか打ってもらってます。それ余裕でできます。これがうちの特徴なんですけど、分業するんです。全員にやってもらうってことはしない。得意な人にやってもらえばいい。数字が得意だとか料理が得意とか、それぞれに分かれてやってもらってる。店舗によっては、やっぱり経営管理できない人がある場合には僕がやるとかっていうふうに、それぞれの特性に合わせてながらやってます。

これはビジネスやってるんですっていうのははっきり言ってます。これを最初に言えば、そのつもりでばあちゃんたちも入ってきて、その中でやっぱりばあちゃんらしい緩やかさは出てる。僕としてはやっぱり売り上げががんがん上げたいんですよ。ある店で今、日替わりランチが人気なんですけど、お店、会社としては30食40食売って2〜3時間で6万ぐらい稼ぎたいんですよ。でも、ばあちゃん店長が、「いや、もう20食でいい」と言ってるんですよ。「もうそれ以上つくと疲れるし、余ったらどうすんの、あんた」って言われて、「はい、じゃあ20食で行きましょう。20食で黒字になるような体制でやりましょう」って僕ものんでるんです。

僕も知らなかったんだけど、昭和50年代から国でもそんな発想があったんですね。これは大きくは間違っていないと思います。何が間違ってたかって、まあもう想定できるんですよ、国がやることは。おそらく大きなインフラつくって、建物つくって、維持管理するのに金ばっかりかかるような仕組みでやるから、多分赤字なんだ。僕ら小商いをばあっとやってるんですよ、ちっちゃいビジネスを。だから、お金かけないんですよ。これも驚かれるんですけど、僕30万円しか持ってなかったんです、これで実験をはじめたんです。

(コーディネーター)

その立ち上げ時。

(大熊さん)

そうです。

(コーディネーター)

なるほど。

(大熊さん)

それから先も全然使わないですね。何億ってもうすでに稼いでますけれども、ちっちゃなお金でどんどんこつこつやっていっています、小商いを。そんなリスクなことやったこともう一度もないかな。

(コーディネーター)

ああ、そうなんですか。

(大熊さん)

確かに大型の機械が欲しいけど、でも全部自動化したら、そもそもばあちゃんの仕事要らなくなります。

(コーディネーター)

そうですね。

(大熊さん)

手仕事をプラスに働かせるような流れでどんどんちっちゃな利益を積み重ねていってってというような形です。多分国交省がやったのは、なんか大きな建物をつくって大掛かりにやっちゃったのかなってのは想定できますね。

(コーディネーター)

多分でかい箱つくるのが流行ってた時期ですよ、きっと。

(大熊さん)

でも今回ほんとすごい良かったのは、産業福祉って概念、僕全然なくて、そもそも福祉と混ざり合わないとも思ってたんです。実はそこところ、高知だけじゃなく、今後の日本の未来にとってかなり重要です。言い方変えると、働く福祉って実は一致するんじゃないかなと、今日今回ここに呼ばれて、そういう概念が僕の中で生まれてきました。じいちゃん、ばあちゃんたちが働くって福祉じゃないかなみたいな。

(コーディネーター)

確かに確かに。

(山首さん)

ちょっといいですか。

(コーディネーター)

どうぞ。

(山首さん)

今日ここに社会福祉協議会の職員が1人しかいませんので、私も社協でしたので、ちょっと皆さんにここで話したいと思います。今、縦割りの行政の事業ってということで、厚生労働省か総務省かみたいな話がありました。実は社協も仕事ということで、生きがいをつくるということは一生懸命やってるんですよ。例えば生活困窮者の方ですとか障がい者の方ですとか、その人が働くことで、自分が世の中にいていいんだ、私はこのまちにいていいんだということ思える場を一生懸命、一人一人丁寧に丁寧に寄り添いながらやってるんですよ。もちろんそういう仕事をしている上で、今までの社協には、まあいわばボランティアさんがたくさんいたんです。そういう社会活動がいっぱいできた人たちがいっぱいいた時代をもう通り過ぎていってるんですよ。なので、これから考えていくのは、これからの社協のあり方、または福祉のあり方です。それは一人一人支えなくてはいけない人はもちろん社協が支えなくちゃいけないんですけど、問題は私たちの年代です

ね。60代70代のこれから80代90代を迎えようとする人たちと一緒に、これから先の福祉を考えていく新たな時期になっていったということです。

もう1点言うと、今社会の家族構造が変わってきました。なので、昔は家族でやっていたことができなくなってきて、もうあたかも家族の代わりに、社協は貯金の整理から、棚の上の片付けからもう走り込んでいってやってあげなくちゃいけない、そういう時代になってきたんです。なので、社協の仕事の大事なところとして、仕事というものをどうにか社会というものと結んでいくということもあるんです。しかし、1人を支えることっていうところに追われすぎていて社協がそこに手を出せません。畦地さんが悔しいがるところなんですけど、でもそういう視点っていうのをやっぱり社協もこれから持っていかななくちゃいけないなということで、利用者としては、総務省なのか厚労省なのか、あったかだろうが集落活動センターだろうが全然関係ないんです。けど、社会福祉協議会の職員も集落活動センターの職員も、その視点は持ってないといけませんよということを私も言ってます。

(コーディネーター)

ありがとうございます。これまで日本はまあまあ景気のいいまま来て、いよいよというべきか、前回、前々回の国勢調査で人口減少、下り坂に向かい高齢化率も上がってるという中で、仕組みそのものを抜本的にそろそろ変えていかないといけない状況にあります。これまで福祉と言われていたセクショ



ンだったりその他のセクションも、経済・ビジネスみたいなものとバランスの是正ってことをおっしゃってました。まさにそのとおりだと思うんです。それこそ大熊さんの取り組みってのは、時としてはローカルベンチャーって言われたり、なんかいろんな言われ方をその時々でされてきたと思うんですけど、実はある意味ではこれから普通になるような世界をなんかつくりようとしているんだらうなというふうに思ったりもします。

ぼちぼちフロアからのご質問とかコメント、ぜひ積極的に受けたいと思っています。割とコンパクトな会ですので、もう遠慮せずに、お三方への質問だったり、あるいはこの議論に乗っかってのコメントだったり、あるいは基調講演をお聞きしての大熊さんの講演の内容に対するご質問でも、まあどんなことでも構いませんので、どなたかいかがですか。よろしくをお願いします。

(会場)

今日はありがとうございました。まさに我が家で母と一緒にこういう話をしてた最中だったので、すごく勉強になりました。我が家の母の場合は、ずっと床屋さんだったんですけど、ある程度の歳が来て引退しなくちゃいけなくなり、働きがい求めて、娘にこっそり黙って別のところに働きに行ってたんです。そこの雇われの床屋さんです。そうなんです



けど、今84歳なんですけど、やっぱり年齢がネックになって、皆さんに「娘さんにどうしてそんな働かされてんの」とかいろいろ言われることがあって、その経営者さんがやめてくれっていう話になって、やめたんです。けれども、やっぱり先ほどのお話じゃないですけど、うちの母にもファンもついてて、なんか引きこもりの若い青年だったらいいんですけど、もうしつこくしつこくうちの母がいろんなこと髪切りながら聞くんで、その方と仲良くなって、あのおばあちゃんおらんかったって言って探してらっしゃったっていうお話を聞いて、ちょっと役に立ってたんだなと思ったんです。

母がやめてから、これまで働いてた分を私がお小遣いで月3万ぐらいあげてたんです。そしたらどんどん元気がなくなってきて、カートですとか杖をつく生活になってます。このさっきのチャートじゃないですけど、やりがいだったりとか、人に「ありがとう」って言われること、自分で稼ぐことって大事なんだなって、今日もう改めて思いました。さっきの話じゃないですけど、孫に何かをプレゼントするのを、私からのお小遣いじゃなく自分で働いたやつから出したかったんだなと思って、今日帰ってすぐまたいろんな話したいなと思っています。

今、食がメインやと思われるんですけど、例えばあちゃんがやる婆バーとか、そんなのも面白いなと思いつつ、ぜひほかの分野も広げていってほしいなって、ちょっと思った次第でした。すみません、なんかぜひやってほしいなというリクエストです。

(コーディネーター)

ありがとうございます。やっぱりその不労所得じゃないことが大事みたいなことはあるのかもしれないですね。今のお話聞いていかがですか。

(大熊さん)

すみません、もうどんどん思い出してきて、また大事なところ今日話してなかったけど、ス

タンフォードのケン教授が来たってところの話なんです。例えば僕、相当現場でいろいろ感じてるので、スタンフォードのケンさんと意気投合したところが、重要なのですが、これ言うのを忘れてました。ケンさんはストレスを与えてはいけないんじゃないかと、適度なストレスを脳に与えることが重要だっておっしゃったんです。それは僕も一致してます。ばあちゃんに金のこと、上がりがどうか日商がどうか、ちょっとストレスをかけるんです。

(コーディネーター)

なるほど。

(大熊さん)

ストレスって、我々若い人はかかりすぎちゃってるんですよ。過度なやつは駄目です。でも、ストレスがかからない状態ってどういうことかっていうと、幸せな状態じゃないんですよ。無気力を生む。だから周りが少しストレスをつくり出してやる。これが多分答えなんじゃないかと思って、高齢の方々に付度して保護してあげようって勝手にみんなやってるけど、実はちょっとストレスかけたほうが脳と体にいいってことが科学的に分かったっていうことですね。なので、少しこき使うのが社会として何が悪いんだ、本人の健康のためだろうってことをちゃんと国民が分かること、じいちゃん、ばあちゃんたち、ちょっとこき使おうかっていう国民性がないと思うんです。本人もこき使われて喜ぶっていうことは、科学的に証明されることなのです。

(コーディネーター)

なるほどなるほど。

(大熊さん)

少しストレスをかけてやる。

(コーディネーター)

どうぞ畦地さん、手を挙げていらしてます。

(畦地さん)

今のお話聞いて、思い出したことがありました。私がいろんなヒアリング行ったときに、福島県鮫川

村というところがあって、そこは大豆で村おこしをしているまちなんです。「手・まめ・館」というところで、豆とかをいろいろな物産にしていました。その村長は当時大樂さんという方でしたが、その村長は豆の検定員の資格持ってて、村長自らできた豆の検定するんですけども、60歳以上の生産者の豆は通常の倍で買うんですよ。それは何かというと、私には苦い思い出があるって話から始まるんです。どういうことかということ、その村長はもともと家が農薬とかそういう農業資材を売ってる店で、本人もそこをやってたんですけども、自分がもういい歳になったら、「母ちゃん、もういいから、奥のほうで楽しとってくれ」って言ったらしいです。そしたらお母さんに、「お前はほんとの親孝行を知らん」と、親を楽にさせることが親孝行じゃないんだということ説教されたって言ってました。まあすごいお母さん子だったということで、さっきの話から、いろんなお母さんの話をしながら僕の前で泣いてました。そういう経験があって、ほんとの親孝行というのは楽をさせることじゃないんだと、本人ができることを続けさせてあげることだっていうことで、とにかく高齢者に一生懸命豆をつくってもらって、それをまちが高いお金で買い上げて、まちのその加工施設で豆腐とかいろんなものにして売ろうというのをやったんですね。

もう一つ思い出したことがあったのは、昔「カーネーション」という朝ドラがあったでしょ。コシノジュンコ3姉妹のお母さんの物語、あれ、若いとき尾野真千子で、途中から夏木マリに替わるじゃないですか。あるとき見てたら、その娘さんがこう言うんですよ。「母ちゃん、なあ、もうええ歳やから、もう仕事をやめたらどうや」って言うんですよ。「もうだいたい歳のまでずっと働いてきたから、もうやめえ、もう恥ずかしいから」って言うたら、その夏木マリ役のお母さん、何て言ったと思います。ちょうどこういう研究をしたときだったんで、僕はもう強烈に覚えてますよ。こう言ったんですよ。「あんたら、母ちゃん殺す気か」。

(コーディネーター)

へえ、なるほど。

(畦地さん)

お母さんの声に出さないけれども、叫びはそういうことやないでしょうかね。世の中には声に出さないけれども、自分ができることを取り上げられて、俺を殺す気か、ワシを殺す気かって思ってる人がいるんじゃないかと思います。

(コーディネーター)

ありがとうございます。ほかに質問とかコメントとか、どうぞ。今3人手挙げていらっしゃるんですね。順番に、お願いします。1人ずつお願いします。

(会場)

働き方で委託されるっていうのがあるというふうにおっしゃってましたが、この委託の場合に、御社の大熊さんの会社は全然ノータッチで、おばあちゃんリーダーに任せて委託をしてっていうふうにさっきおっしゃったような気がしたんですけど、それでお間違いないでしょうか。それと具体的にもうちょっと事例を挙げて教えていただけますか。



(大熊さん)

委託っていうのは、そもそも細かく業務に応じて契約します。まあこれは最初つくるの大変ですけど、1つじゃないですよ、さまざまです。うちだけでも何十つありますので、ちょっと全部は説明できないけど簡単なのから説明します。「ばあちゃん喫茶」って飲食店をやってます。地域のおばあちゃんたちが働きに来ます。全部の経費はうちの会社が持ちます。おばあちゃんたちは1円も出しません。働きに来て、そのときのその日の売上げの25%を

おばあちゃんたちが報酬として取っていいっていう契約をします。なぜ25%なのかっていうと、飲食業というのは人件費が25%超えると飲食店としては成り立たない。だからマックスまで払うという仕組みでやってます。これは、1日何千円かもらえますので1人か2人で回したほうが、時給より高くもらえるんだけど、そこには店長の考え方もあります。委託がうちの会社にとって悪いことは、指示命令ができないんです。今日は1人で働きなさいとかそういう命令はできないし、メニューをこうしなさいも一切言ってないです。お客さんは喜ばせることは絶対ですけど、命令はできません。

さっき言ったように、僕は20食じゃなくて50食売ったほうがおばあちゃんたちむちゃくちゃ収入増えると思うのに、おばあちゃんたちがもう20食で止めるって言ったら、それはそれでもいいんです。だから、お互いにとって今それはいいことだと思ってるんですけど、そういうお店の運営管理をする委託をやっています。裁縫とかも分かりやすいです。バッグ1個つくったら8,000円ねっていう契約です。1人で全部仕上げる人もいるんだけど、5時間かかろうが3時間で終わらせる人もどっちみち8,000円取ってくださいっていうもので、早くやった人は報酬が高くなります。でも、おばあちゃんたちせかせか急いでやっても、自分のペースで休憩とったりしてゆっくりやっても、どうぞということです。だから、品質はこのレベルじゃないと駄目ですって、品質だけを見てます。あとはどれだけ時間かかろうが自由なんで、今お互いが委託はいいよねってなる感じです。雇用だとそれはできないんですよ。絶対に干し芋30パックつくってもらわないと困るっていうのが雇用です。80歳90歳の方に生産性ってやつは合わないですね。お互い不幸になっていくところですね。

ほかにもいっぱい例はありますよ。お手元の「ばあちゃん新聞」、その「ばあちゃん新聞」って文字、これデータに取り込んだんですけど、文字書いたら1万円とか2,000円。これも委託です。これを1枚2,000円で買い取るっていう契約です。僕だったら1枚書けばいいじゃないかと思うんですが、こだわりが強いおばあちゃんは、なんか納得がいけないから3枚、4枚書くんですが、でも金額は一緒、1

枚の完成品を買い取るよっていう、そういう形です。

まああんまり不幸が起きにくい感じですかね。雇用の頃はもっと僕が会社として言ってたんですよ。いや、50個だと駄目なの、80個つくってくれみたいなことを。ほんと言えは僕はおばあちゃんたちに楽しく幸せに生きてもらいたいのには、やっぱり雇用だと、時給、福岡だったら1,080円なんですけど、これ払うためには生産性上げてもらわないと困るんだっていう、そういう議論にばかりなるので、お互い不幸になったりする。そもそもおばあちゃんが僕に言ったんですよ、いや、今の時給がいくらなんて知らねえ、いくらでもいい、600円でも800円でも、私は仕事がしたいんだと。よし分かった、じゃあ委託のほうがいいよねってことで、今すっきりしてますかね。

(コーディネーター)

ありがとうございます。じゃあ続いて後ろの方、よろしくお願いします。

(会場)

すみません、堀と申します。ちょっと話の論点がずれるかもしれませんが、ボランティアのことにちょっとお聞きしたいと思います。実は私、高知市のまちづくりファンドの委員をしています。応募されるボランティアが年々、有償ボランティア

という形に変わってきてるんですよ。このままでいくと世の中、ボランティア、無償ボランティアっていう部分が死語になるのではないかとちょっと思ってるんですけども、それで先ほど土佐町の社会福祉協議会でずっと勤務されてた方が、立ち上げのときからボランティアさんと一緒になってやってきたという話がありました。高齢者の生きがいの部分にもちょっと入るボランティア精神ですよ、そういうのがあるんじゃないかと思ってるんですけど、そのボランティアの位置づけについてです。今日は産業福祉ということで、お年寄りが小銭を稼ぐことがいかに大切かというのが分かりました。ただその無償っていうか、自分の気持ちをボランティアで手助けするという部分がなんか世の中から消えていくような気がして、そこが私の頭の中でまだ、整理つかないんですが、これからどのような位置づけになっていくのかなと思っていて、ちょっとよかったら教えてください。

(コーディネーター)

どうぞ。

(大熊さん)

ありがとうございます。今日お話ししたとおり、僕もボランティア、非営利出身で来ておまして、今は国、行政の関係でもいろいろやっていますので、もうちょっと大きな話になりますけれども、ボラン



ティアはこれから先、人がいけませんので当然成り立ちません。もうこれ事実です。それはなぜなのかっていったら、ボランティアだけが減ってるんじゃないくて、人口が、人が減ってるんですよ。現在我々の世代ではちょっと余裕がなくなってきたんですよ。これはボランティアだけじゃないです。確かに日本人の心の部分も余裕がなくなってるというのは事実ですが、地域活動、自治会、町内会、すべて衰退してってます。

ちょっとごめんなさい、僕も伝えたつもりだったけど伝わらなかったところですけども、ボランティアは絶対に必要な社会インフラだし、絶対必要だと思います。僕が言いたかったのは、どっちかが正義かということじゃないんですよ。どっちも正義だし、どっちも必要なんです。バランスが重要です。こんなビジネスをする人たちって僕しかほとんどいないので、対立構造にしてはならないというのが重要ですね。だから、うちのスタッフのばあちゃんたち、ボランティア活動しながらうちに働きに来てます。行き来するってことでいいんですよ。有償ボランティアでもいいし、無償でもいいし、僕も実はボランティアまだやってるんですよ。金がすべてだとは全く思っていないので。でも僕も生活があるし、特にやっぱりスタッフ、若い人に飯食わせるっていう意味では、ボランティアではやっぱり飯は食わせられない。飯っていうのは、ごめんなさい、生活ですね。

世代の話もそうなんです。今ご存知だと思うんですけど、僕より若い世代の人たちが恐ろしいことを言ってるんですよ。「じいちゃん、ばあちゃんたちにばかりお金使って」と同じ国民が言ってるんです。やっぱり考えなきゃいけないのは、若い人にだけ突っ込もうじゃなくて、バランスを整えるべきだって思ってるんです。それを完全に無視してる連中もいますし、まあ誰しも敵じゃないんだけど、そのバランスを考えずに自分のこと考えてるだけの力を

持った人たちがこの国を食いつぶしてるんじゃないんですかっていうところは、やっぱり問題提起したいかなと思っています。なので、我々はボランティアか小商いで争うんじゃないんだと思います。

(コーディネーター)

ありがとうございます。まあなんか新しい形の共存をなんか緩やかにつくっていくみたいなイメージを受けました。

じゃあ手前の方、ご質問、コメントよろしくお願ひします。

(会場)

脳にストレスを与えるという言葉についてです。その人がその仕事について、生きているっていうことに対しての生きがい、喜びとかっていうものがあるって、そこにストレスっていうんだったらいいんですけど、そうじゃなく、ただただ続くストレスって、かえて人が無気力になっていくっていうふうに思います。先ほどの方が言ってたボランティアも、それこそ20年くらい前に学生たちの間ですごい流行ってたんですね。ボランティアという言葉だけが走ってしまって、その肝心の精神っていうところが全然抜けてて、そのボランティアを受けたものがえらい目に遭うっていうようなことがいっぱいあったみたいな感じでした。ストレスを与えるというこ



となら、その人がそれに喜びを感じるとか思うとかって考えながらのものでなければならぬと思います。

(大熊さん)

そうですね。すみません、なかなかやっぱり短時間じゃ伝わらないところだと思うんですけども、基本的に生きがいがいたり幸せって他人が与えるものでも、他人が、お前、幸せだろってということでもありません。すみません、僕の伝え方が悪かった部分がありますが、感じるのは個々人なんですよ。

(会場)

それは分かってるんです。

(大熊さん)

なので、ごめんなさい。そこが伝わらなかったところで、幸せを与えてあげるとかいう姿勢はないんですよ。僕自身、ストレスを与えと言いましたが、これはすべて僕が与えたり感じさせるものではなくて、感じるのは本人たちです。ですから、もちろんおばあちゃんの現場でストレスというのは脳の話であって、僕が過度なストレスを与えて、よし、ストレス与えてあげてるんだからっていうスタンスではないです。つまり目標も人によってはストレスを感じますよね。人によってはストレスを感じるんです。おばあちゃんに目標って言うのを言うと、よし、頑張ろうってなる人と、それが行き過ぎたストレスになる人もいますよね。それを把握して、これはちょっと技量が要るとは思いますけれども、ストレスを与えてるというよりか、前に向くような目標を設定してってることですね。嫌なことを何か押しつけてるってということではないですよ。

(コーディネーター)

多分モチベーションを高めるためにということですね。

(大熊さん)

そうです、そうです。

(コーディネーター)

この方にはちょっと責任ある仕事をお任せしてみようとか、勤務日数をコントロールしようとか、なんか裏ベースはそういう解釈ですよ。

(大熊さん)

結局畦地さんと結構近いなと思って、余計な付度して、もう究極ストレス与えない。働きに来なくていいよ、家でゆっくりしときって、会社が言うのかってことなんです。働こうっていうストレスをそもそもこのビジネスで与えてるんです。本人たち来ようが来まいが、自由なのです。絶対来いって言っていない。もともとうちは来たいとき来いっていう自由出勤制なんです。今シフト組んでますけれども、それも自由。来なきゃいけないとか強制も一切ないんですよ。ごめんなさいね、これは難しいところなんです。適度なストレスであることが重要です。これは間違いなく幸せを呼びます。今も皆さんからの視線と厳しいご質問で私はもう行き過ぎたストレスが常にかかっています。

(コーディネーター)

それは良くないです。

(大熊さん)

だいぶ良くないストレスがあります。

(山首さん)

いいですか。

(コーディネーター)

どうぞ。

(山首さん)

さっきのボランティアについての質問、これすごくいい質問やったと思うんです。産業と福祉、その間にあるボランティアなんですよ。

(コーディネーター)

そうか、なるほど。

(山首さん)

私は、福祉と産業両方にいるんですけど、私もボランティアの人たちと一緒にやってきました。その人たちは、ほんとに自分のやりたいことをボランティア活動の中で求めてきました。まあボランティア論の中でもかなり語られてきたことなんですけども、私、今になって思うんです。ボランティア活動で得られるもの、これはその人にとっての代償ですよ。ボランティア活動で得られるものっていうものを、人間関係だとか人とつながりだとかいろんな経験の積み重ねができるとか、そういう代償として捉えられるのは本人ですよ。なので、ボランティアなのかお金をもらうものかっていうのはもうその本人の考えで、しかもストレスでしょう、って思うんですよ。

私たちが今考えなくちゃいけないこの産業と福祉はその構図にあって、私が「とんからりん」を立ち上げるときに、役場の職員には「ボランティアで続くか、そんなものが」と言われ、地域の方には、「それは行政のやることや」、「税金払いゆがやき、こんなもん住民が力を合わせて、金使うてやることないやろう」って言われました。その間で私たちはせめぎ合いました。でも、ボランティアの人たちは、「支えられるところは私らが支えます」「行政のできるところは、私らがします」とちょうどその間をとってくれました。そして、最後に、私らの運営した中からみんなでちょっとずつお金を貯めて、それで小遣いにしようねっていう仕組みができたというところなんです。まさにビジネスなのか、その中間なのか、その軸をどこに置くのかっていうのはこれから非常に考えなくちゃいけないところです。もちろんお仕事もされるしボランティアもする。社協職員もその支援をするときに、仕事ということをして成立させるのか、社会参加という支え合いの場へ置くのかっていうことがあるんです。その軸をどっちに揺らすのかっていうのは、みんなの考え方やというふうに思います。

(コーディネーター)

ありがとうございます。そうしましたら、ちょっとお時間のほうがぼちぼちになってまいりましたので、最後にお三方から、一言ずつというにはちょっと

と時間があるので、コメントいただいて一旦着地ということにさせていきたいと思うんですが、どなたからまいりましょうか。ありがとうございます。畦地さんよろしくお願ひします。

(畦地さん)

やっぱり高齢者の方が元気に働くためには、お金って大事なんですよ。でも、お金が最上位じゃないんですよ。さっきから言われているように、人に必要とされるとか請われるとか、その結果お金があればいいですよ。我々が庭先集荷をしたときのアンケートのことを、さっき思い出しました。例えば野菜でも何でも出したら大体全部売れたらいくらっていう金額を出すじゃないですか。例えば全部売れたとしたら3,000円の予定が売れ残って2,000円しか売れなかったというのと、2,000円出したものが全部売れたっていうと、全部売れたほうがすごく喜びが高いんですよ。同じ2,000円ですよ、場合によっては、5,000円出して3,000円売れて2,000円残るよりも、2,000円出して2,000円全部売れるほうが喜びは高いです。

同じことを赤岡青果市場の水田幸子社長が言っていました。市場は売り切ることが大事なんだった。売れ残りを出さない、全部売り切る。あそこは最後の1個まで売り切るんですよ。我々がピアリングに行ったときにも、朝から50台ぐらいずっと大豊のほうから須崎のほうから山のほうを集荷に行くんです。それが集まってきてせりにかけるんですけども、自分たちが見に行った後ろからついてきた集荷者は、これぐらいのビニールにはねのきゅうり1個だけ集めてきた。それ一体最後どうなるんだらうと思ったら、最後まで残りました。市場の職員が、「こうたって、お願いだからこうたって」って言ったら、誰かがしょぼしょぼと手を挙げて全部売れました。水田社長は、売り切ることが大事なんだ、残してはいけないと言っていました。

それと彼女が言っていたのは、やめさせないということです。だからあそこは、庭先集荷をするんです。今県内で市場って10ぐらいですか。当時11あって、県内11の総売上が200億円のうち100億円を売った会社ですから、半分を占めています。その収益のもと、来るのを待つんじゃないんですよ、集めに

行くんです。集めに行くことになった理由というのは、まさしく「もうわしは歳やけん、持って行けんかった」というおじいさんの一言に対して、「じゃあ取りに行こうか」っていうところから始まって、じゃあわしも、わしも、わしもというので、50台の車で集めに行くようになりました。それで県内の半分を売り上げる大きな青果市場になったんです。やめさせないということなんです。

ですから、これ繰り返になりますけれども、できることは取り上げないことです。そしてその技、智慧ですよ、智慧をしっかりとつないでいくこと、活かしてあげること、できたらそれを次の世代に伝えていくことです。大熊さんところで若いスタッフもいるということなので、それが多分次の世代に伝わっていくのかもしれないと思います。国レベルでは中小企業の承継の問題が課題になっていますけれども、地域の小さな技、加工にしろ、食品にしろ、そういうものの継承も大事じゃないですか。それを冒頭の漬物の件なんかはやめさせたわけでしょ。食品で人の命を守ることも大事、だからそれはしなくちゃいけないですよ。でも一方で、どうやったらそれを続けてもらえるかというのを考えるのが政治でしょう、行政じゃないんですかっていうと思うんですね。

それがやはり足りていないこの国、なんか大きなところだけ目が行っている。高市さんが強い経済とか言っていましたね。僕が思うのは瀬戸大橋です。瀬戸大橋って吊り橋じゃないですか。大きいケーブルでぶら下げてますよね。あれってもとは何か知ってますか。もとは1本のピアノ線ですよ。ずっとたどっていくとピアノ線を束ねて1センチぐらいの束になり、10センチぐらいの束になり30センチになって巨大な1本のケーブルになっている。1本のピアノ線が弱ったらどうなります、ということです。つまり小さな小さな経済を強くして、その結果経済が大きくなるんだらうと思うので、私は高市さんが言っているのは、ケーブルは強くするけれども1本1本のピアノ線なんかどうでもいいんだよみたいな、そんなふうにししか聞かえないと感じます。

なので、こういう一人一人の伝統や技術や技というものを大事にするような小さなビジネスが、ほんとに今からの日本を支えていく、人口減少になって

いく日本を支えていくし、それから未来の何かな、文化・伝統、最大の商品というのは文化ですから、だって真似されないですもん。文化を大事にしない国は滅びます。高知県ちょっとやばいですけどね、最近はお金で何か変えようとしている、そう見えます。そういうようなことで、ぜひさっきのお母さん、もしよければ床屋復活したらどうですか、と思います。

(コーディネーター)

ありがとうございました。じゃあ順番によろしくお願いします。

(山首さん)

私は社会福祉協議会で仕事をしていて、そのときになかったのは、やっぱり大熊さんの言われる産業ですし、お客さんという視点です。やっぱり福祉の現場はいろんな制度を動かしていけない立場にありますし、こちらが左手で商売して、こっちで制度っていうわけにはなかなかいかないんです。でもこれからは社協も本当に地域の社会参加とかそういうことを考えていこうとすると、やっぱりこういうビジネスの人たちともっと知恵を出し合うようなこともやっていかないと社会資源が生まれません。土佐町なんか小さいまちです。たった3,400人の小さいまちですので、ビジネスが生まれません。でも、集落活動センターで最近ウラジロガシという木の葉っぱを薬剤会社に売り出しました。それが今高齢者の仕事になってきています。ですから、やっぱりビジネスとつながっていく、会社とつながっていくことで仕事生まれていくということです。じゃあ住民がそこまでできるかってそこまではできないので、例えば役場の人とか社協とか地域支援企画員さんとか、そういう人たちが知恵を出してそこに支援をしていく、その環境をつくっていくということが支援のあり方であって、何もかも施していくことが支援ではないということを感じます。

一方、社協、集落活動センターで働いている人を見ますと、じゃあ集落活動センターに福祉の視点があるかということです。産業、産業ってやってますけど、例えば私がずっと社協で言ってきたのは、そこに参加できている人はお金を儲けているけれど



も、参加できてない人は集落活動センター関係ないんでしょうかということです。いや、そうじゃないでしょう。じゃあ認知症の人はいつまで経っても集会所の隅で集められて、それでいいんですかってことをずっとやってたんですよ。だから集落活動センターも県もそういうことを融合して考えていく、誰かそういう視点で物事をデザインしていく人が必要なんじゃないかということで、私、尾崎知事のときに集落活動センターのことでお話しすることがありました。そのときに、あったかふれあいセンターと集落活動センターの融合について問いました。そしたら尾崎知事はそれをやりたいんだと、ぜひやりたい。でも、福祉と集落活動センターの連携がうまくいかないんだっていうふうに言っていました。

じゃあどうしたらうまくいくのか。やっぱり今日の皆さんのいろんなお立場からの視点を持つことが必要です。社協の人もそういう視点で産業っていうところとどうつながっていくのか。産業の部分も福祉の部分とどうつながっていくのか。今防災をやってますけど、防災は完全に福祉ですよ。住民がつながってないと、どんなに消防車が立派になっても初期消火はできませんから、やっぱりそういうことで両方がそれぞれの視点で何か考えていくことっていうことをしないとこれからは駄目ですし、もう制度が限界に来ています。私はこれから老後に突入しま

す。さあ、どうするでしょう。一方ちょっと羨ましいのは、息子たち夫婦たちには子育て支援のお金がいっぱい行ってます。私たちは、これから定年も延びてどんどん働かなくてはいけない。実はその後にまだ働くかという思いも分かります。

海外の人なんかは、引退したら海外旅行して優雅にやってるのに、日本人は働いて働いて死ぬのかと言っていて、ほんとにそんなに思うときもありますが、でも、やっぱり私は私なりに私ができることで社会貢献ができていけるような環境があったらいいなと思います。それは、まだあの人出てくるのかと思われたくないからです。もうええ加減で引きやって言われたくないからです。やっぱりそこに仕事というチャンスがあって、そこに出て行っていいんだっていう居場所があるっていうことが私の老後に必要だなと思ひまして、現役の元部下に私の老後を満足させるような福祉事業を展開してやっていつもお願いしてます。私らが今度は社協にお世話になる番やきねって言ってます。みんなで頑張っていきたいと思ひます。ありがとうございました。

(コーディネーター)

ありがとうございました。では大熊さん、お願いします。

(大熊さん)

ありがとうございます。ずっと今日話させていただいた働くとかビジネスっていうのと福祉が混ざり合うってのは、僕はこれからあってもいいかなっていうことを一つ思います。それと、今日僕がこういうことを勝手に話して、はい解散っていうことでなくて、パネルディスカッションとその中での来場した方々との対話と、僕は非常にいい機会を得たなと思っています。もともと99.9%反対されてた事業を逆にこれだけ賛同者を全国につくってきたんですが、僕は世の中の確かに誰にも言われてはないけど全体最適みたいなものを見たいと思っています。見たいというか俯瞰して全体を見てバランスが崩れてるよねっていうところはバランスをとることに着手してるので、結局は全体最適を見ながら部分最適やってるんですよ。

なので、皆さん、ここは重要なところなんですけど、皆さんが正解なんです。別に僕が正解とか思ってなくて、どれも正解なんです。官僚とか、国のこともそうです、全部の持ち場で自分ところの意見とまわりだけ見てるから見えてないけど、串刺しにして、横串刺しにしてみるんです。高齢者とか地域とかって言っても、対象者同じなんだから、これをもうちょっと俯瞰して隣のビジネスの畑の人も含めて物事を見るんです。僕も福祉の人たちを絶対否定しないってしてるんですよ、まず聞こうと。お互い正義が正解があるんですよ。これをぶつけ合ってつぶし合うってのが良くないんですよ。これをお互いちょっと歩み寄りながらどっちも正解だ、それも大事だよねと。でもバランスが崩れてるんだと、だから正しに行きましょうっていう考え方なんですよ。なので、絶対皆さんが正義だと思えば正解だと



思うけれども、俯瞰できるんでみんなでバランスを考えましょうということです。特に今がじゃないんです、多分20年後30年後考えて、次の世代の子どもたちのことに頭を置くといろいろと考えが巡ると思います。もっと先のことを考えて今手を打つべきなんじゃないかなと思っております。僕が正解とも思ってないけれども、みんなで答え合わせしながらやっていければなと思っています。

(コーディネーター)

大熊さん、ありがとうございました。というわけで、最後、ちょっとだけしゃべらせてもらっていいですか。ほんとにちょっとだけしゃべります。先ほど大熊さんだったり皆さんから、いろんな正解がある、単一の正解はないっていうニュアンスでお話されたと思うんですけど、ただ一つ絶対に正しいことは、我々いずれ高齢者になるんですよ。自分は必ず行く道だということです。なので、それぞれそのまま正解っていう話がありますけど、一人一人やっぱり自分ごとにして持ち帰っていただきたいと思えますし、そこで働く側なのか、あるいはマネジメントする側なのか、役割はそれぞれあるかと思うんですが、絶対にみんな高齢者になるので、なんかそういうふうにして一人一人が捉えていくことが大事だなと思います。そういった今日のお話などを、個人レベルでも企業レベルでも、あるいは公的ないろんなところでも少しずつ普及させていくっていうのが今日のシンポジウムの1つの目的でありますので、ぜひこの「産業×福祉」、産業福祉っていう言葉、あるいはまあ新たな共通言語が出てくるのかもしれないんですが、少し思考のレイヤーに1枚入れていただいて、今日は閉会ということにさせていただきます。パネルディスカッションをお開きということで、最後、司会にたすきを渡したいと思えます。ありがとうございました。

(司会)

ほんとにありがとうございました。改めて4名のコーディネーター、パネリストの皆さんに感謝の意を表したいと思います。拍手をお願いいたします。ありがとうございます。3時間かかってしまいました。長時間ありがとうございました。

ただ、ちょっと手前みそですが、今日のシンポジウムはなかなか良かったかなというふうに思っております。ほんとにありがとうございました。いろんな学びにも気づきにもつながった。私もセンター関係なく自分ごととして、ちょっと実践課題が浮かびました。いずれにしても今日お集まりいただいて聞いていただきましたし、発言もいただきました。その中で今日目的とした産業福祉の意義についてはご理解いただけたんじゃないかなというふうに思っているところがございます。

当センターといたしましては、冒頭若干お話ししましたが、今地域の持続可能性を保障する地域運営組織研究というものを研究の1つの課題にして、

今日コーディネーターを務めていただいた野田さんが座長なんですけれども、県の中山間地域振興対策課の協力も得ながら、集落活動センターへのアンケート調査を実施しているところです。この研究も実はこの産業福祉の考え方を仮説としながら今進めているところでもありますので、今後ともこの産業福祉の課題には、高知県自治研究センターとしてはこだわりながら取り組み進めていきたいと思っておりますので、皆様方のご協力心からお願い申し上げます。今日ご参加いただいたこと、ほんとにありがとうございました。お気をつけてお帰りください。これで本日のシンポジウムを閉会とさせていただきます。



参考資料 産業福祉シンポジウムに至る経過と開催目的

1. シンポジウム開催に至る経過

- (1) 2005年12月に再建した「社団法人（当時、2012年4月1日に公益社団法人に移行）高知県自治研究センター」が最初に取り組んだ基礎研究は、「高齢者が行うコミュニティビジネスがもたらす福祉的効果に関する研究」でした。この研究は、「現在の福祉医療費の一部を、農産物などの商品を集荷するビジネスの不足分に回し、一般ビジネスでは成立しないビジネスモデルを創出することで、結果的に福祉医療費を抑制し、全体的に社会的コストを抑えられないか」という仮説のもと、2007年10月から2年半にわたって黒潮町において農産物の庭先集荷事業を実施するという実証実験を行いながら、その効果や影響について検証してきました。その結果、耕作放棄していた高齢者の耕作再開が、小金稼ぎに結び付き、これが生きがいとなるなどの福祉的効果をはじめとして農地保全などの様々な効果をもたらすことを確認できました。また、この実証実験は、黒潮町の行政施策として引き継がれることになりました。
- (2) 高知県自治研究センターは、この「高齢者が行うコミュニティビジネスがもたらす福祉的効果に関する研究」を通じて、次のとおり産業福祉という概念の重要性を確認してきたところです。

既存の高齢者に対する福祉サービスは、高齢者は弱きものという前提であり、心身が虚弱化してから受給できるサービスが大勢である。サービス利用の要件が要介護状態や生活困窮などいわゆる「否定的」なものであり、お金の回る仕組み（産業）ではあるが、儲けているのは高齢者ではない。福祉が産業となるカタチ（福祉産業）といえる。

これに対し、高齢者は本来弱いものではなく、知識や技能を持っている重要な人材・人財であると捉え、「肯定的」な側面を重視し、産業活動＝「小金稼ぎ」が福祉的効果＝「元気・生きがい」をもたらすというカタチである。（＝産業福祉と呼ぶ）

高齢者がサービスの仕組みの一部となり、高齢者自身が「儲け」「楽しみ」「元気になる」営み、「サービス受給者が主役の仕組み」づくりが重要である。

- (3) 2024年「手作りの漬物を買えなくなる？」「生産者の心を折る『許可制』6月から」などの報道が相次ぎました。食品衛生法の改正による経過措置期間が2024年5月31日で終了することで、すべての生産者が厳しい衛生基準を満たさないと製造販売ができなくなったからです。新たに「営業許可」が必須となった業種は漬物製造業や水産製品製造業などであり、特に道の駅や直売所に漬物を出品してきた個人にとっては、営業許可をと

るための施設設備の改修を行うことが困難である人が多く、漬物などの製造を断念せざるを得ないことが社会問題になりました。

- (4) このことに関して高知県自治研究センターの理事会で、次のような問題提起がありました。「一連の報道を見て感じた一番の問題は、このことに対して声をあげたのは産業側からだけで、福祉現場から声や意見が全く出てこないことである。漬物づくりが生きがいである人たちはたくさん存在するが、泣く泣くやめる人が大半だ。これは、高齢者の幸せについて何も考えられていないということの意味しないだろうか。いまだに産業と福祉はバラバラであることを痛感した。」この提起を受けて、理事会で議論を行い、当センターとして、2023年度から、持続可能な地域を築いていくうえでの拠点となる地域運営組織（集落活動センター、あつたかふれあいセンター）の役割と機能について検証するための研究を実施しており、産業政策と福祉政策の縦割りの弊害の克服が大きな論点となっていることも踏まえ、あらためて「産業福祉」研究に取り組んでいくということが確認されてきました。

2. シンポジウム開催の目的

都市部・地方間や所得など社会のあらゆる分野での格差拡大に歯止めがかからない中、日本は本格的に人口減少時代に突入しています。高知県にとって事態は一層深刻で、人口減少に拍車がかかり、集落消滅は現実の問題となっています。当センターは一貫して、「競争・自己責任」では地域衰退に歯止めがかからないこと、そうではなく「連帯・共生」の社会を追求する立場を明確にして、地方から見た豊かさや幸福追求の視点をもった地方自治の研究活動に取り組んできました。

コミュニティビジネス研究＝産業福祉研究は、当センターの原点の研究であるとともに、地域が存亡の危機を迎えた今日こそ、産業福祉の考え方の浸透が重要となってきたと考えます。それは、危機を克服するためには、住民と行政の協働の強化が求められるが、真に協働するためには行政の縦割りの打破が不可欠であり、産業福祉の考え方の浸透はその突破口となると考えられるからです。

したがって、ストレートに「産業福祉」の意義を明らかにするという目的をもって、このシンポジウムを開催していきたいと考えます。加えて、現在実施している「地域運営組織のあり方の検証に関する調査研究」（集落活動センターとあつたかふれあいセンターの連携を軸として、地域運営組織のあるべき姿を模索する研究）の問題意識とも重なるものであることから、このシンポジウムの成果を同研究に活かしていくことも追求していきたいと考えています。

